

「心の教育」学習資料集

小学校・高学年編

京のキコシヤ

「心の教育」学習資料集

明日へのユビカシ

とびらを開けて

わたしたちは人間
地球上の生き物の中で
最も すぐれた動物だと
いつか みんなと学びあった
いまもそうだと思っている

けれども ほんとうにそうなのか
最近とても気になってきた

人間のすばらしいところよりも
人間の困ったところばかりが
新聞 テレビで 目にとまる

親子のつながり
仲間のきずな
いのちや平和のたいせつさ
わたしたち人間だからこそ
いちばん強く願うこと

地球上の生き物の中で
人間が最も心やさしい動物だと
いつかだれもが感じるような
そんな人間をめざしたい

「明日へのとびら」

開いてみよう
人間のかげやきとぬくもり
心に深く はぐくもう



きょう
京の子ども
あす
明日へのとびら

小学校・高学年編^{へん}

目次

◎第一部

1 桜の色の話	志村ふくみ	4
2 いのちの尊厳を自覚しましょう	上田正昭	8
3 「いのち」を深く愛する	中西進	12
4 サンゴの心配	日高敏隆	16
5 Tさんとアフリカの子どもたち	徳川輝尚	20
6 心の痛みを分かち合う	安藤仁介	24
7 「テクノボー」になりたい	山折哲雄	28
8 祖父の話	小寺正一	32
9 自分をつくる楽しさ	衣笠祥雄	36
10 見るごと、見せること	茂山千三郎	40
11 言葉の力 ―俳句との出会いなど―	坪内稔典	42
12 感動する心、熱中する心	鈴木俊哉	46
13 木版画であらわす日本の美	木田安彦	50
14 美しきふるさと京都	崔善今	54
15 わたしが出会った日本	ドナルド・キーン	58
16 日本で育ちゆくきみたちへ	千玄室	62
心の広場		66
府民ほっとメッセージ(1)		67

◎第二部

1 みどりキャンフとわたし		70
2 弟の入院		74
3 守ろう環境、守ろう地球		76
4 あいさつについて		80
5 おじいちゃん、おばあちゃん		84
6 人間のががみ		88
7 駅伝大会		92
8 小学校生活 最後の運動会 ―絆―		96
9 わたしたちの夢		100
10 これからもずっと		104
心の広場		108
府民ほっとメッセージ(2)		110
京都府案内		

この資料集は

あなたが人間として、幸せに生きていくために、何を
たいせつにすればいいのか、どうすればいいのか、
自分で考え、みんなで学び合うためのものです。

第一部

第一部は、京都にかかわりのある方々が、みなさんの生き方を応えんするために書かれた文をのせたページです。

*人間として生きていくうえで考えたい大事なテーマが集められています。

第一部のあとは「府民ほっとメッセージ」のページです。

みなさんを見守り、はげますために届けられた府民のみなさんの声をしようかいています。



1 桜の色の話

志村 ふうみ

今から二十年くらい前のことです。詩人の大岡信さんという方がわたしの家を訪ねてこられました。ちょうどそのころ、桜で染めた着物があつたのでお目にかけてました。

大岡さんは、ほんのりとうす紅色べにいろに染まった色を見て、「ほほう、これは桜の花で染めたのですか。」と言われました。わたしは「いいえ、花ではありません。桜の幹みきです。」と申しますと、大岡さんはすこし意外そうに「えっ、あの黒っぽい幹からですか。」と言われました。そこでわたしは申しました。「花からはこのうす紅色は出ないのです。桜は幹や枝えだにやがて春になって花がさくときのために、じつとこの色をとめています。ですから花がさいてしまうと、もうこの色は出ないのです。桜にはかわいそうですね、花のさく前にわたしの方であらうと、この色は出ないのです。」と言うと、大岡さんは「ああ、そうですね、さく前に志村さんがいたであらうと、こんな美しい桜色に染まるのですね。実は言葉というものにも何か共通点があるような気がしますね。心のなかでじつと何かをためている、感動したこととか、あつそうか、と

思ったことが、心のなかにたまっていて、思わず言葉が飛び出してくることがありますね。そういう言葉には力があります。心のなかのものがふっと文章になって出てくることと、この桜の色とはどこか似ていませんか。」と言われました。

そのときの体験を後になって大岡さんは、「言葉の力」という文章にまとめました。それが中学校の教科書にのったのです。

その教科書で「言葉の力」を習った群馬県の藤原という山の中の中学生から手紙をもらいました。

「自分たちは国語の時間にこの文章を習って、桜の枝で何か染めてみたいと思いました。染め方を教えてください。」と言うのです。わたしはさっそく手紙に染め方と染めた系を入れて送りました。ところが、言われたとおりにやってみても紅色が出ないと言うのです。「一度学校へ来て染めてみせてください。わたしたちは首を長くして待っています。」と書いてあるではありませんか。さすがのわたしも重いこしを上げて、雪のちらつく山の学校まで出かけました。そして、生徒さんたちと山で桜の木を切ってきて、理科教室のコンロでたき出しました。わたしも生徒さんも、美しい紅色が出ると疑いませんでした。ところがどうでしょう、染め上がった色は黄色でした。わたしは生徒さんの前でうそを言ったことになりました。生徒さんたちも「なあんだ。」という感じになってしまって、わたしはほんとうに困りました。穴があつたら入りたい気持ちでした。しかし、そのときとっさにわたしは、「藤原の桜は黄色です。これがあなたたちの土地の桜の色です。」と申しました。わたしがかつてに

桜は美しいというす紅色べにいろが出るなんて信じていたことがまちがいで、自然はもつともつと複雑ふくざつでいろいろな色をもっている。京都きょうとの桜の色と群馬ぐんまの桜の色がちがうのはあたりまえで、わたしは思い上がっていたことにはずかしく思いました。そのとき、すぐ目の前の女の生徒さんが、「なんでもやってみればほんとうのことがわかるのですね。」と言いました。わたしはその言葉におどろきました。うれしく思いました。

自然はうそをつかないのです。ほんとうにやってみればわかるのです。うそをついたり、まちがったりするのはいつも人間なのです。「これはこうだ。」と、自分のあさはかな考えで決めてしまうことはできません。わたしはそのとき自然から教わりました。生徒さんから教わりました。群馬の桜は、雪の深い厳きびしい気候のなかで育ったために黄色だったのです。自然は、わたしたちが考えているよりもつともつと長い年月をいろいろな経験けいけんをしてきているので、一つとして同じこと、同じものはないのです。同じ形、同じ色もないのです。わたしたち一人一人ひとりがちがうように、どんな小さな虫でも、すべてちがいます。その一つ一つに命があるのです。学校で学ぶこともたいせつですが、自然から学ぶことはもつとたいせつです。「ほんとうのことはやればわかります。」と言った生徒さんの言葉は、そのたいせつさを教えてくれました。どうしてこうなったのか、なぜなのか、そこから広い世界に出發するのです。やってみてわかったことを、そこから、それならどうしてこうなったのだろうと疑問ぎもんをもち、研究心をもち、自分の考えを広げてゆくのです。それは、とてもおもしろいことだと思いま

す。桜で染めた色が、うす紅色だと思いきんだわたしですが、世界じゅうの桜に一つ一つちがった色が染まるのだらうなと思っただけでワクワクします。それはいろんなことにも言えることで、ほんとうに楽しいことがいっぱいあるのだということだと思えます。



▲開花を待つ桜の木

2 いのちの尊とつとさを自覚じかくしましょう

上うえ田だ
正まさ昭あき

人間はとかく自分の力だけで生きていると思いがちですが、自分一人ひとりの力でのみ生きているのではありません。だれでも親おやがあり友達ともだちがあり、町や村の人々のなかで生きています。そして世の中にはたくさん動物や植物そんざいが存在そんざいしており、人間は人間どうしばかりでなく、自然のなかで生きています。人間は空気を吸すわずに生きることも、水を飲まずに生きることもできません。人間は自然によって生かされてきたといっても過言かごんではないでしょう。

ところが、人間は人間こそいちばんえらい存在だとうぬぼれるようになり、人間は一人だけでも生きるこゝとができるさつかくと錯覚さつかくするようになりました。古代でも中

世でも、人間は自然の力をあがめ、自然の力をおそれつつしみ、自然と調和して暮らしを営んできましたが、近世さらに近代や現代に入りますと、自然をおそれずに自然を破壊し、地球を汚染してきました。

「人」という文字を見ても、ななめの画がたがいに支え合っています。助け合って自然と共に生きることがたいせつです。他人の痛みを感じることできる人間、やさしさといたわりの感性をもつ人間になることが、人間が人間らしく生きることにつながります。こうした感性は訓練しなければ身につけることはできません。

生きているものには必ず死があります。死によっていのちは絶たれます。いのちの尊さとは、死をしつかりとみつめることによって実感することができます。いのちは生きることのすべての基礎となります。

戦争は、あらゆるいのちをうばう最悪の行為です。


人間が平和で楽しく生きるためには、自分を支えてくれているほかの人々に「こころ」から感謝かんしゃすることを忘れてはなりません。二〇〇四年にノーベル平和賞を受賞されたケニアのワンガリ・マータイさんは、日本語の「もったいない」という言葉と出会って、「すばらしい」と感動されました。「おかげさま」という日本語は、ほかの人からのいたわりやはげまし、天地自然のめぐみへの感謝の言葉です。こうした日本語は古代から使われてきました。

ものが豊ゆたかになって、生活が便利になるにしたがって、自然によって人間が生かされていくという根本のところを多くの人間は見失ってきました。ものが豊かになって心が貧ますしくなりました。京都きょうとの生んだ心学しんがくの祖そといわれる石田梅岩いしだばいがん（一六八五〜一七四四年）は、「人の人たる道」「心の発明」が肝要かんようであると説きました。

いのちの尊さを自覚し、他人の痛みを感じ、やさしさといったわりの感性をもつ人間となり、心の通い合う家庭さらに学校や地



▲石田梅岩



域^{いき}をつくって、自然へのすなおな態度^{たいど}を
養ってゆくように努力したいと思います。
それは二十一世紀を生きるきみたちへの期
待であり希望です。

3 「いのち」を深く愛する

中西進なかにしすすむ

みなさんは「いのち」について深く考えたことがありますか。

いや、考えようとしても「いのち」はどこに、どんな形をして存在そんざいしているのか、とてもわかりにくいですね。

例えば、生きている生物は、それだけで「いのち」をもっているのでしょうか。わたしは、ちがうと思います。ただ生きているだけで、何も考えず何もしない人は、死んでいるのと同じではありませんか。

反対に、もう亡なくなっている人でも、「あの人はすばらしかった。」「こういうすごいことをした。」などといわれる人がいるでしょう。立派りっぱな科学者だった野口英世のぐちひでよ、すばらしい小説を書いた夏目漱石なつめ そうせきは、そういう人です。

ですから、生きていても死んでいるのと同じような人は、「いのち」をもっていないし、死んだ人でも、まだまだ人々に強くはたらきかけている人は「いのち」をもっていると、いえるでしょう。

だから「いのち」とは、人生を生き生きとかがやかせるものではないでしょうか。もちろん、動物

にも「いのち」があるでしょう。ただわたしたちに、見えにくいだけかもしれません。

あなたの毎日は、生き生きとしていますか。鏡に向かってごらん下さい。きみの目はかがやいていますか。「いのち」をもっているかないかは、簡単かんたんにわかりますね。

それにしても、どうしたら毎日が生き生きとするのでしょうか。目はどうすればかがやくのでしょうか。元ともだち氣のない友達にだって、「さあかがやいてごらんよ。」とっているだけでは、役に立ちませんね。どうしたら「いのち」をもてるのでしょうか。

実はわたしたちには、からだの力のほかに、もう一つ、たいせつな力があります。わたしはそれを心力しんりきと呼んでいます。人間は体力と心力によって、生きています。

心力とは何でしょう。気持ちきもちが活発に動くときの力が心力です。

どんどん勉強しようとする心、進んでいいことをしようとする心、喜んで人を助け、他人の気持ちや自然のありさまに美しさを感じる心、そのほか何にでも、心が生き生きと動いていくとき、その人には大きな心力があるといえます。

もちろん、動きまわっていれば心力があるなどというのではありません。静かに落ち着いて考える力も、大きな心力です。

そこで、この心力をもつときに、人間は生き生きとし、生命がかがやくのだと思います。きみも心力をもってください。あなたも「いのち」が弱いと思う友達がいたら、心力をもたせてあげてください。

い。

むしろ体力は心力によって強くなります。少なくとも、体力を弱くする心力はありません。

さて、このように体力と心力は、人間に「いのち」を与え、「いのち」を実感させるはずですが、この実感を、わたしは幸福感だと思えます。自分が幸せだと思えることが、最高の「いのち」の実感だと考えるのです。

およそ幸福感ほど、人によってもちがい、場合によってもちがうものはないでしょう。どんなに立派なプレゼントよりも、ふとつんだ草花をお母さんがかみに差ししてくれたことがうれしいということもあります。大好きな友人に「お誕生日おめでとう。」と書いてえんぴつ一本をあげたら、うれしうに「ありがとう。」と書いてくれたことは、ありませんか。

この満足感を「幸福」と呼びます。

日本語には「幸い」という言葉がありますが、これは花が一面にさく状態を意味する言葉です。そう、幸福感とは、心のなかに花がさきあふれるように感じる喜びなのです。

この「幸い」に向かって、心力をはたらかせることが、人間が「いのち」をもつ喜びとなります。

しかし「わたしは、そんな幸運



にはめぐまれない。」と決めてい
る人も、いるかもしれませんね。

体力だって弱いし、心力なんて
無理だ、幸福などといっても関係
ない、そういう人がいるでしょ
うか。

いえ、幸福はじっとしていは
与えられません。自分から努力し
て求めるものですから、もっと
もっと努力をしましょう。心にも
力があることがわかったのですか
ら、心力によって、一人一人が自
分の「いのち」を深く愛してい
たいものです。



4 サンゴの心配

日高敏隆

地球温暖化で海も暖かくなっています。日本のまわりの海の水も、温度が少しずつ高くなってきました、昔はずつと南の方の海にしかいなかったサンゴが、北の方の海でも見られるようになってきたという話が、ときどき新聞にのったり、テレビのニュースで報道されたりもしています。

このままいくと、そのうち日本の太平洋岸では、あちこちでサンゴが見られるようになるかもしれません。

そうなったらすてきな、とみんな思うでしょうが、ことはそれほど簡単ではないのです。

日本の沖縄をはじめ、世界の暖かい海のアちこちでたくさんサンゴが白くなってかれて（死んで）います。サンゴにとっての大事件です。

このサンゴの「白化」と呼ばれる「事件」がなぜ起こったのかを調べてみたら、なんとそれは海水の温度が上がったからであるということがわかりました。

サンゴには赤い色をした微生物が共生しています。藻の一種であるこの微生物が、海の中のサンゴにあたる太陽の光を受けて栄養物をつくり、それをサンゴにわたしているのです。サンゴは自分で食



▲白化したサンゴ

べるえさだけでなく、共生している藻からもらうこの栄養物もたいせつな栄養にしています。それでサンゴしようには赤そのほか、いろいろな色のサンゴが元気に生えているのです。

ところがどういわけか、サンゴと共生するこの藻は、海の温度があまり高くなると、サンゴからぬけ出して、どこかへ行ってしまうのです。赤い藻がいなくなってしまうサンゴは白くなって、だんだん元気がなくなり、結局は死んでしまいます。

地球温暖化現象で、海の水の温度があまり高くなると、かえってサンゴがかれてしまうことになるのです。海が暖かくなったといって、ただ喜んでるわけにはいきません。

サンゴの大敵たいてきとして有名なのはオニヒトデ

ですね。大きなオニヒトデはサンゴにとりついて、むしゃむしゃと食べてしまいます。

オニヒトデにおそわれたサンゴは、全部食べつくされてしまうわけではないので、そのうちにまた枝をのばして回復してきます。けれど、水温が上がりすぎて白化が始まったりしたサンゴはなかなか回復できません。

よく知られているように、サンゴは海の中に卵と精子を放出し、受精した卵からかえったサンゴの幼生が、海流に乗って流れていきます。そして適当な場所にある岩などにくっついて、育ち始めます。

つまり、サンゴの子は遠くから流れ着いてくるのです。ですから、サンゴが増えていくのには、はなれた場所にあるサンゴがたいせつなのです。例えば、沖縄本島の瀬底という所に生えているサンゴは、西にある慶良間列島から流れてきた子が育ったものだと考えられています。

このごろわかってきたのは、サンゴは陸上から海に流



▲沖縄の海の美しいサンゴ

れこんでくる土や砂すながとても苦手だということですよ。

島の陸上で畑を耕かかしたり、農地改良をしたりすると、かなりたくさん土が海に落ちて、おきの方へ流れていきます。そういう土のつぶがサンゴにかかる、日の当たり方が悪くなって、サンゴは元気がなくなります。そういうサンゴがオニヒトデにおそわれて食われたりすると、回復できずに死んでしまうのです。

それから、これも最近わかってきたことですが、サンゴの生えているところに住んでいる大きな魚がとてみたいせつなはたらきをしています。

魚たちの中にはサンゴを食べているものもあります。そういう魚はサンゴにとっては敵てきですが、そうでない魚もいます。つまり、サンゴのものではなく、サンゴに生えている海藻かいそうを食べている魚たちです。

こういう魚がいてくれないと、サンゴが海藻におおわれて、日が当たらなくなり、サンゴが弱まってしまうのです。

ところがこういう大きな魚はとてもおいしくて、高く売れるので、水産業としてはたいせつなえものなのです。さあ、魚かサンゴか、どちらをたいせつにしたらよいのでしょうか？

サンゴについてはこういう心配ごどがいろいろとあります。サンゴたちが美しく元気に育っていけるようにするのはたいへんなのですね。

5

Tさんとアフリカの子どもたち

徳川 輝尚

六月、梅雨のあけた沖繩の空は青く晴れわたっていました。それだけに、民家の中はうす暗く、部屋の様子はよくわかりません。少し目がなれると、おくの間、一人の青年がねているのが見えてきました。Tさんです。その顔は無表情で、ぼんやりと天じょうを見つめていました。ほとんど何もしゃべりません。

Tさんは、沖繩の高等学校に通っていたとき、器械体操の選手でした。沖繩県の体育大会では、準優勝を勝ち取りました。ところが、高校二年の終わりごろ、鉄棒の練習中に誤って手がすべり、頭から地面に落ちてしまいました。そして、第五けいついをだつきゆうし、そのときから、手も足も動かない重度の障害者になってしまったのです。ばら色の人生は、真つ暗になりました。失意のどん底につき落とされたTさんは、その後、どんな生活を送ったのでしょうか。

Tさんは、お母さんの世話を受けながら、不自由な生活を送ることとなりました。食事にも、入浴にも、はいせつにも、生活のすべてに介助がいります。動かない手足は細くやせおとろえ、運動選手だったころのりゅうりゅうとした筋肉はどこにも見られません。希望を失ったその姿は、まるで死ん

だようでした。

お母さんが病身だったため、Tさんは、二十二才で沖縄をはなれ、京都府の南丹市にある重度障害者の施設「こひつじの苑」に入りました。施設に入ってからもTさんの心はふさがれたままでした。

「世の中で、自分ほど不幸な人間はいない。」とこぼしてばかりいる暗い青年でした。

▲食料の配給を待つ子どもたち（アフリカ）



ところが、ある日、Tさんの心に大きな転機が訪れました。それは、一冊の雑誌を見ていたときのことでした。その雑誌には、アフリカのビアフラ地域で、ききんのために食物がなく、骨と皮になって死んでいく子どももの写真がのっていたのです。これを見たたん、Tさんは、大きなショックを受けました。「自分は、いちばん不幸な人間だ。」と思いこんでいたTさんは、「世の中には、もっと不幸な人がいるのだ。」と知ったのです。「今までの自分の考えはまちがっていた。」と、Tさんは思いました。

て死んでいく子どもたちの苦しみが、他人ごととは思えませんでした。Tさんは、「自分は、もう手も足も動かすことはできないけれど、アフリカの気の毒な子どもたちのために人生をささげたい。」

と決心しました。そう思ったとき、Tさんの心は晴れ上がり、遠くアフリカへと飛んでいきました。そして、会ったこともないアフリカの子どもたちを助けるために、「牛乳一本でも送りたい。」と、募金活動を始めたのです。

その後、Tさんは、病気のため、三十八才で苦しみに満ちた人生を終えました。亡くなるとき、Tさんが残した最後の言葉は、「ありがとうございました。」でした。お金もなく、地位もなく、名誉もなく、人知れず、短い一生を終えたTさんでした。でも、障害とたたかいながら、貧しい子どもたちの命を救うためにつくしたTさんは、その人生を美しく燃やしつくしたのです。だからこそ、感謝しながらかがやかしい最期をむかえることができたのでしよう。

Tさんが募金活動を始めてから三十三年がたちました。Tさんのまいた善意の種は、「こひつじの苑」で大きく育ち、八年後には、「まごころ募金」が生まれました。今も、毎月十五日には、障害者の人たちが、わずかなおこづかいを出し合い、日本赤十字社やユニセフ（国連児童基金）を通して、きがや災害に苦しむ人々のために送り続けています。

世界の貧しい開発途上国では、戦争、干ばつ、こう水、さばく化などで食料が不足しています。地球の人口の十二パーセントにあたる八億人がおなかをすかしています。一年に千百万人の子どもたちが、きがや栄養失調、感染症により、五才の誕生日をむかえることなく死んでいきます。今日一日で、約三万人の子どもたちが、おなかをすかし、病気で苦しみながら死んでいくのです。物の豊かな日本

では、人々は好きほうだいに食べ、おなかがいっぱいになると、平気で食べ残しています。でも、その食べ残した食物がないために、たくさんの人々が死んでいくのです。なんと悲しいことでしょう。Tさんは、それを見すごすことができませんでした。そして、愛の手を差しのばしたのです。

このお話は、実際にあったことです。わたしたちは、Tさんのすばらしい人生にならって、かけがえない命を尊とくとび、自分のできることを実行したいものです。困こまっている人や苦しんでいる人、さみしがっている人に、何かできることはないかを考えてみましょう。家でも、学校でも、街角でも、「あなたにできること」があるはずです。一つ一つの行こう為は小さくても、その種が芽を出し、枝えだを広げ、地球をおおっていきます。今日から実行しましょう。



▲こひつじの苑

6 心の痛みを分かち合う

安藤 仁介

あなたは犬やねこを飼ったことがありますか。こん虫や金魚を飼ったことがありますか。動物はなれてくるとほんとうにかわいいものですね。また、アサガオのような花や、トマトのような野菜を育てたことがありますか。毎日、精をこめて水をやり陽に当てて、花や野菜が順調に大きくなってくと、ほんとうにうれしいものですね。

でも、えさが合わなかったり病気になったりして、飼っている動物の元気がなくなると、とても心配ですね。雨が降り続いたり日が照り過ぎたりして、花や野菜がしおれてきても、やはり心配ですね。特に、運悪く事故にあつて動物が死んでしまったり、長雨や猛暑のために植物がかれてしまったりしたときは、本当に悲しくなりますね。

こうした経験はだれにでもあることでしょう。まして動物や植物でなく、自分のお父さんやお母さん、兄弟姉妹のように、血のつながった人が病気になったときは、もつともつと心配でしょう。そして不幸なことに、そんな人が亡くなってしまうと、言葉も出ないほど悲しく、心がものすごく痛むことでしょう。親友の病気や死についても、おそらく同じことがいえるでしょう。

ところで、あなたはテレビを見たりラジオをきいたりしていますね。ときには新聞を読むこともあるでしょう。テレビやラジオや新聞は、わたしたちのごく身近で起こることも伝えますが、そうではない遠いところで起こったことやわたしたちと関係のうすいことも報道ほうどうします。例えば、アメリカの大リーグでイチロー選手が年間二百本安打を放ったこと、二〇〇四年のオリンピックで日本が十六個こも金メダルを取ったこと、また、これまで太陽系たいようけいのわく星の一つとされてきた冥王星めいせいがわく星からはずされたことも知らせてくれます。しかし、テレビやラジオや新聞の報道のなかには、楽しくないものやうれしくないものもふくまれています。いや、そんな情報じょうほうの方が多いかも知れません。最近でも、アメリカの南海岸をおそったハリケーン・カトリーナがニューオーリンズの街をこすいう水でおおい、たくさんの方が家や財産ざいさんを失い、肉親や知人と生き別

▼ハリケーン・カトリーナによるひ害（アメリカ）





▲テロ行為によるひ害（イラク）

れになったこと、アジアの南東部に大津波がおし寄せ数多くの死者が出たこと、中東地域でいまだにイスラエルとアラブ系住民の武力こう争が続いていること、さらにイラクでは宗派のちがう信者たちがテロ行為による殺人をくり返していることなど、見たくもない聞きたくもないニュースもわたしたちの目や耳に入ってくるのです。

あなたは、こうしたニュースを見たり聞いたりしたときに、どのように反応しますか。それは自分に関係のないことだとして、知らないふりをしますか。どうにも解決しようのないことだとして、そのままに放っておきますか。そうではなくて、ここはこのようにする方がいいとか、そのようにしてはいけなとか、自分なりの考えで批判しますか。さらに進んで、それぞれの事故の原因や事件の背景を理解しようとする、望ましい解決策を見いだそうとします

か。

わたしたちの反応はさまざまであって、こうでなければいけないと決めつけることはできません。わたしたちは一人一人生まれ育った環境がちがいますし、もって生まれた性格も同じではありません。ただし、あなたがどのように反応するにせよ、一つだけ忘れてはいけないことがあります。それは、こうした事故や事件によって、なげき、悲しみ、「心の痛み」を感じる人が必ずいるということです。最初にふれたように、わたしたちは自分が心を寄せた動物や植物に強い愛着を感じます。まして自分が愛し、自分が愛された人に限りない親しみを覚えます。そして、その人を失ったときに、取り返しのつかない「心の痛み」を感じるのです。自分に関係のない事故や事件によって、そうした「心の痛み」を感じている人がいること、自分がその人の「心の痛み」を減らし取りのぞくことができな

としても、自分がその人の立場に立てばどんな「心の痛み」を感じるかを想像してみること、それによつてその人の「心の痛み」を分かち合おうとすること、それだけは忘れてはいけないのではないのでしょうか。

7 「デクノボー」になりたい

山折 哲雄
やまおり てつお

宮沢賢治が、「雨ニモマケズ」の詩を書いたのは、昭和六年（一九三一年）のことでした。三十七才で死ぬ二年前です。結核が悪化し、微熱にあえぎながら、病床で手帳に書きつけたのです。

雨ニモマケズ

風ニモマケズ

雪ニモ夏ノ暑サニモマケヌ

丈夫ナカラダヲモチ

慾ハナク

決シテ瞋ラス

イツモシズカニワラツテイル



▲宮沢賢治

© 林風舎

こんな言葉で始まる詩です。元気で健康な自分の姿を夢見ていたのです。しかしそのような自分にはなれなかった。無欲で、微笑をうかべている、落ち着いた人間になることが理想だった。しかしそんな自分にもなれなかった。病床で悲しんでいる賢治の姿が見えるようです。

一日ニ玄米四合ト

味噌ト少シノ野菜ヲタベ

アラユルコトヲ

ジブンヲカンジヨウニ入レズニ

ヨクミキキシワカリ

ソシテワスレズ

ぜいたくなものを食べず、そぼくな食事でもいいと言っています。自分よりも他人をたいせつに考えて生活したいものだ、ともつぶやいている。自分から語ったり主張したりする前に、まず世の中のことを学び、人のいうことをよく聞こうではないか、とも言っています。病のため、前に進み出ていく気が失われていたのでしょうか。いや、それよりも、もっとひかえめにけんきに生きたいなあ、というため息のような声が、そこからは聞こえてくるようです。

野原ノ松ノ林ノ蔭ノ

小サナ萱ブキノ小屋ニイテ

東ニ病氣ノコドモアレバ

行ッテ看病シテヤリ

西ニツカレタ母アレバ

行ッテソノ稲ノ束ヲ負ヒ

南ニ死ニソウナ人アレバ

行ッテコハガラナクテモイイトイヒ

北ニケンクワヤソシヨウガアレバ

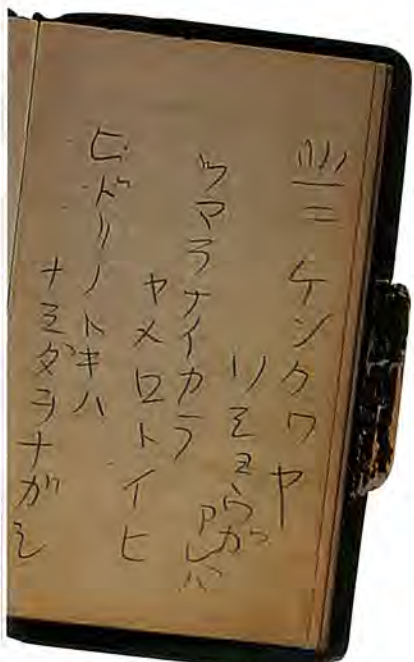
ツマラナイカラヤメロトイヒ

世の中には、貧^{ます}しさと病と争いが満ち満ちています。特に賢治^{けんじ}が生きた時代はそうでした。そして人間はやがて死んでいかなければなりません。そういう人々をなんとか助けなければならぬ、と心のなかでもだえるようにさげんで、西に走り東に足を運んで手助けをしようと思っっている賢治がそこにいます。いったいそんなことをたった一人^{ひとり}でやれる人間が、どこにいたのでしょいか。でも賢治は、大真面目^{まじめ}になって、ああもしたい、こうもしたいと考えていたのです。

ここでちょっと想像^{そうぞう}してみてください。賢治の一生をみると、詩や童話を書き、農業の改良に心をくだき、学校の教師^{きょうし}になったり宗教^{しゅうきょう}の世界に頭をつっこんだりして、いろいろな世界に興味^{きょうみ}をいだいた人だったことがわかります。星のことや岩石のことに、植物や動物の分野にもなみなみならぬ知識^{しき}をもった人でした。人間がもっているいろいろな可能性^{かのうせい}にいつも目を光らせていたのです。しかし一人の人間の方で、果してそんなことができるものなのかどうか、そういう疑問^{ぎもん}と不安が、いつも賢治の頭のなかにはうずをまいていたのだと思います。

ヒデリノトキハナミダヲナガシ

サムサノナツハオロオロアルキ



ミンナニデクノボートヨバレ

ホメラレモセス

クニモサレス

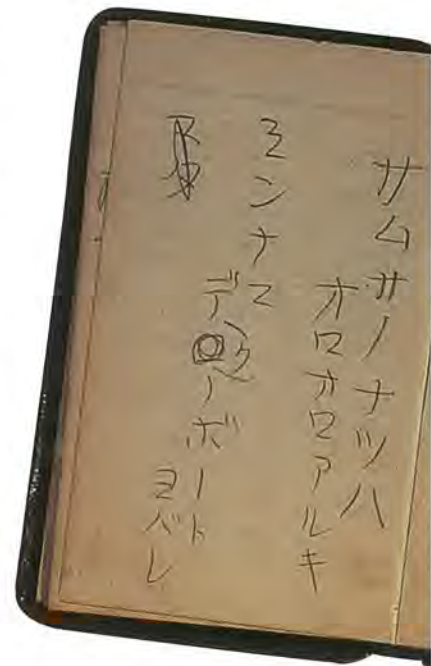
サウイウモノニ

ワタシハナリタイ

日照りや冷夏のような天候の異常の前で、人間がいかに無力であるかを知っていたのです。われわれは努力さえすればなんでも手に入ると思いがちですが、いつのまにか自分を中心に考えるごうまんな人間になってしまっている。それが、賢治にはとてもたまらなかったのではないでしょうか。ほめられても、少しもうれしくはないよ。無視されたって、そんなことなんでもない、そいいながら、ああ、そんな自分勝手な人間の世界からにげだしたいなあ、とも思っていた。みんなに「デクノボー」と呼ばれてもいいや、というつぶやきの声です。

デクノボーとは、「木偶の坊」と書きますが、ようするに「人形」のことです。人間であって、人間ではなくなっているもの、ということでしょうか。病床に横たわり、人生の最期をむかえようとしているときの詩人の姿です。

このとき賢治は、ほんとうは何になりたかったのでしょうか。あの「よだかの星」に出てくるかがやく星になりたかったのでしょうか。それとも「なめとこやまの熊」にえがかれているような、心やさしい熊の仲間になりたかったのでしょうか。あなたなら、どのように考えますか。



8 祖父の話

小寺 正一

ある日曜日、友達ともだちの律子りつこさんの誕生日会たんじょうびによばれて楽しい時間を過すごし、夜八時過ぎに家に帰りま
した。

げん関かんに入ると、母がこわい顔をして立っています。

「帰るのがおそい。もう門限もんげんも過ぎているでしょ。律子さんのおうちの方にも迷めいわくだし、家族も
心配するのよ。気をつけなさい。」

と言われました。

わたしは帰るとちゅうで、少しおそくなったので、謝あやまろうと考えていましたが、帰ってすぐにしか
られたので腹はらが立って、おもわず、

「少しぐらいいいでしょ。律子さんのおうちの人何も言わなかったし。」と言い返して、すぐに自
分の部屋へやに入りました。

机つくえの前に座すわっても、律子さんの家での楽しかったことが、母の厳きびしい言葉でだんだんうすれていく
ような気がして、ますます腹が立ってきました。



お母^{かあ}さんの言うこともわかるけれど、あんなに強く言わなくてもいいのに、友達が残っているのにわたしだけ先に帰ると言えないし、などと思っていました。

それからしばらくして、法事^{ほうじ}で祖父^{そふ}の家に家族みんなで行きました。

祖父は長く学校の先生をしていて、最後は校長先生になって退職^{たいしよく}しています。立派^{りっぱ}な先生だったと評判^{ひやうばん}のわたしのじまんの祖父です。

それぞれの家族のことを話し合っているとき、母は祖父^{そふ}母^ぼに、美子^{よしこ}は最近なまいきになって注意してもすぐに口答えするようになってきた、と話し始めたので、わたしは一人^{ひとり}で二階に上がりました。祖父の家は古いどっしりした建物で、特に二階は昔の物がいろいろ残っています。わたしは、古



いたンスの横にはられた黄色くなった紙に「良薬は口に苦し」と、書かれているのに気づきました。

言葉の意味は少しわかるように思いましたが、薬の広告だったら「苦い」なんて書くかな、おかしいな、と思って、その日の夜、祖父にたずねると、

「久しぶりに美子とゆっくり話をしようか。」
と言って、次のような話を聞かせてくれました。

良薬というのは、いい薬、よく効く薬のことで、それは苦くて飲みにくい、というのがもとの意味で、自分のためになるほかの人からの忠告にはつい反発したくなって、すなおに受け入れられない苦いものだ、ということを教えている言葉だそうです。そのような忠告こそ、ほんとうに役立つ、という意味があるそうです。

そして祖父は、

「わたしも誠吾から最近よく注意されることを思い出したよ。」
と、母の弟の誠吾おじさんとのことを話してくれました。

祖父が知り合いの人の話をする、誠吾おじさんは、その人より自分のことをずっとえらいと思って

いる祖父の気持ちがあらわれている。「思い上がりだ」、ほかの人と話をするときには気をつけるように、と注意するそうです。また、わたしたちが祖父の家に行くと、よく来た、と言って小さいころにはおもちゃを買ってくれたり、最近は「おこづかい」をくれたりしますが、わたしたちが帰ったあとで、誠吾おじさんは、孫の心をものやお金で「※つつている」と批判し、本当の愛情あいじやうではない、と言うこともあるそうです。

祖父は、この話をした後で、

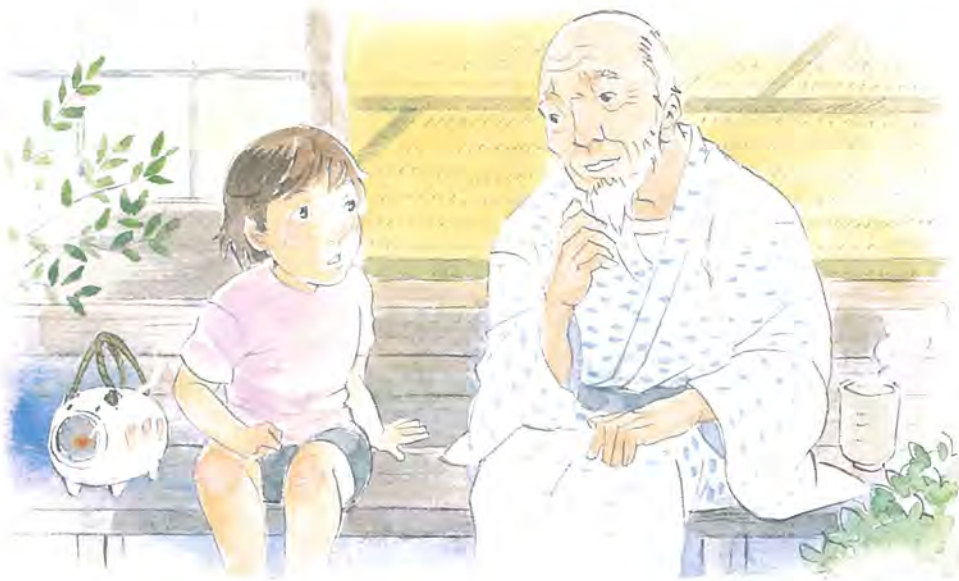
「誠吾にそう言われると本当に腹はらが立つんだが、正しいので反省することも多いんだよ。」

と、少し悲しそうに苦笑いしながら言いました。

わたしは、祖父がわたしに話したかったことが、なんとなくわかったように思います。

「良薬は口に苦し」という言葉は、今でも気になっている言葉です。

※つつている……自分の方へ引き寄せること。



9 自分をつくる楽しさ

衣笠 祥雄

昔から多くの人生の先人たちが語っている言葉に「人生は自分探しの旅である」「人生は船の航海に似ている」などがあります。共通して言えることは「目的をもっていないといけないこと」ではないだろうか？ この言葉をわたしの場合にあてはめてみると「野球」が大きな目標になって人生を走ってきた感じがします。

中学校入学と同時に野球を始めて三十年以上の時間が過ぎ、現役を引退してから気がついたことがあります。以前の自分と大きく変わっていることです。この変化はどこからきているのか考えてみると、「自分をつくる」ということをずっとしてきたということなのです。

小学生のときは柔道やスケート、水泳をしていたので、中学校に入り野球を始めたときは、チームの練習についていくのがやっとの状態でした。キャッチボールやバッティングの基本になる練習はもちろんたいせつですが、いろいろな決まりごとがあるということも二年半の間に教えてもらいました。同学年の友達だけでなく、先輩いや後はいいという上下の立場からは「順番」という決まりごとを、また試合に参加するためには「ルールを守る」という決まりを教わりました。これはフェアプレー精神



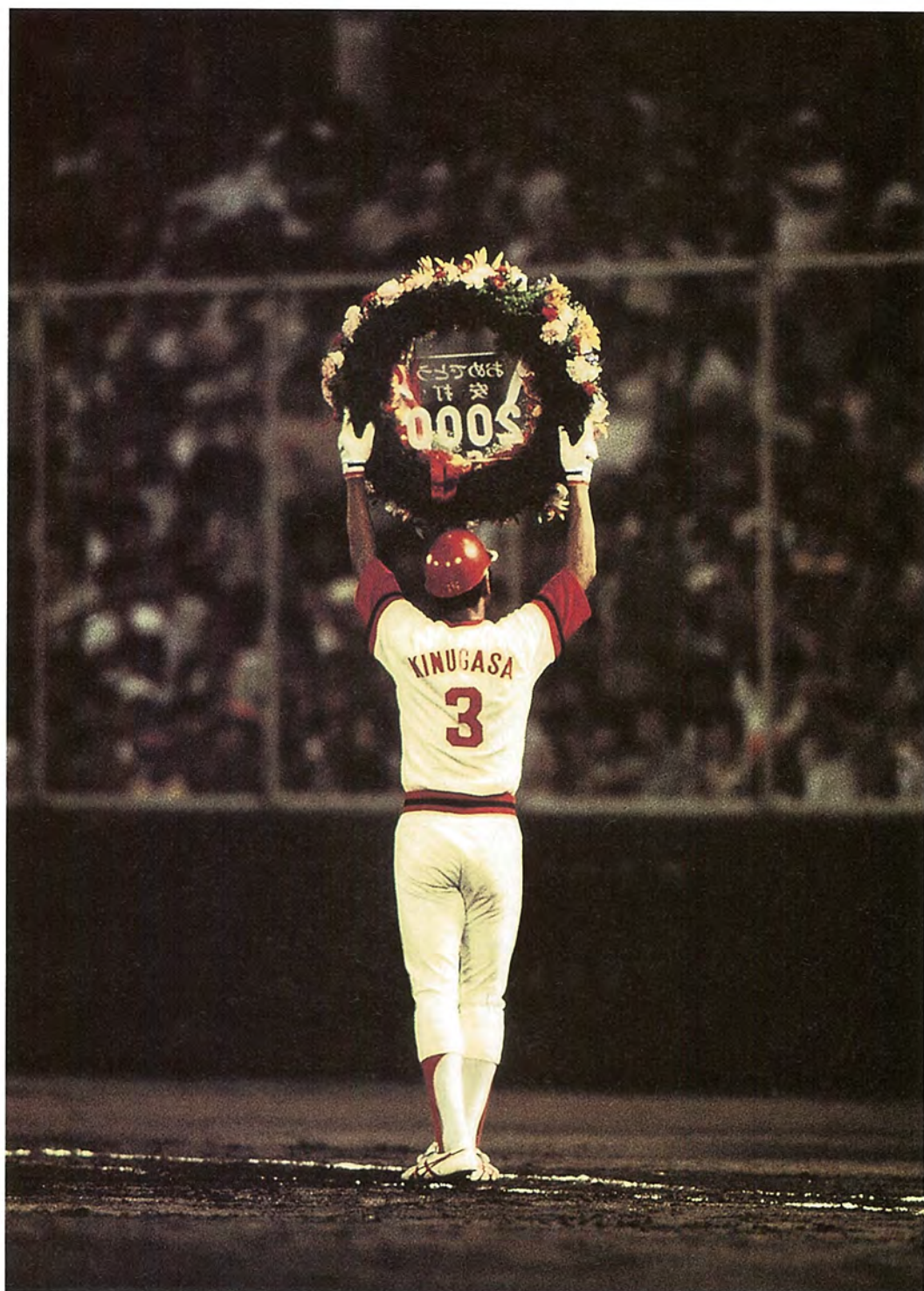
▲子どもたちに野球を教える筆者

にもつながることです。

どのスポーツをするにもうまくなりたいとだれもが思うことですが、それには「技術」が必要でです。より高いレベルの技術を身につけるには練習以外に方法はありません。練習を積み重ねることができた人が、良い成績を残せるのです。技術はつくるものであり、待っていても人はくれないものです。

チームスポーツのいいところは、チームメイトという友達ができることです。ともに練習しているなかで仲間意識が目覚め、団結力が生まれます。

ときにはぶつかり、自分のわがままが通じないことも必ず出てきます。こんなとき、自分の心に「ゆとり」がないと人の言葉を聞き入れることもできないし、反対に相手の気持ちを思いやるようにはならないものです。仲間といっしょに練習をがんばったこと、試合に出られたこと、そしてなにより試合で



▲プロ野球選手時代の筆者(1983年8月9日)

勝ったしゅんかん得られたものは、「喜び」や「達成感」でした。それが次の練習につながる力にもなりました。

「衣笠さん、野球のおもしろさはどんなところですか？」と聞かれることが多いのですが「人がやるから、野球はおもしろいのですよ。」と答えるのです。機械がするのではおもしろくありません。それは機械は変化しないからです。機械の性能は決まっていますが、人は変化できるものだから、そこがいちばん魅力のあるところですよ。「人は失敗をすることもありますが、それを取りもどすこともできるのです。」

大きな目標をもち、夢をもち、がんばると一か月、三か月、半年と時間が過ぎていくにつれ進歩がみえます。問題はその人が「目標」に近づこうとがんばるか？ がんばらないか？ その人次第です。そして、今の自分がたいせつに思えるようになります。自分の強さ、弱さがなんとなくみえてきます。人間は万能ではありません。どれだけ周りから評価を受けている人でも必ず弱いところ、苦手なところはあるものです。そんな自分を知ることがたいせつなのです。そして、長所をおおいにのばす努力を続けることによって幸せを感じ、生きていく喜びを感じ、がんばることのすばらしさが理解できるようになります。また、次の大きな目標に向けて、より充実した毎日が送れると思います。

ほんとうにたいせつなことは自分をどこまで好きになることができるか？ 自分でがんばり、「つくり上げた自分」をだれよりも「好き」になり「たいせつ」にしてほしいと思います。

見るごと、見せるごと

茂山 千三郎
しげやま せんざぶろう

学校の授業開始のチャイムが鳴る。体育系の先生と思われるような声が運動場から聞こえてくる。

「三組、早よ並べー！ 静かにしなさい！ コラー!!」かなりのテンションだ。

楽屋……といっても体育館のステージまで、小さなスペースで舞台準備をしているわたしたちは、

先生のこの声でこれから始まる学校狂言かん賞の空気を感ずる。

「はい、静かに……。」一言だけで、シーンとする学校。

先生がどれだけさげぼうが、どなるうが、まったく静まる様子のない学校。

ざわついているのに、まったく先生の声も聞こえない。しかし体育館に入ったとたんシーンとする学校。実にさまざまだ。

ただ共通して言えることは、狂言を楽しみにしている子どもは、どの学校にもあまりいないということ。どちらかといえればあんまり見たくない。それが子どもたちの本音でしょう。

確かに六百五十年も前の難しそうな古典芸能に胸をふくらませ、指折りに待つ人はいないのかもしれない。でもそこは役者、一度舞台に立てば、見たくない人の目もこちらに向かせる。見たいと思っ

れません。

ていない人の目をどう引きつけるか、もちろん役者のうで次第しだいです。

声こゑ、所作しよさ（狂言の身のこなし）、間まなど、ふつうとはずいぶんちがう空気てみなさんの目を引きつけていくのですが……なかには狂言が始まって、会場を走り回る子ども、一筋ひとすじなわけはいかない子どももあり、実にさまざまです。また「はい、静かに……。」だけで、シーンとする学校の場合には、狂言が始まってもしーン。どんなにおもしろい場面になっても……シーン。実は、こういう学校がいちばんつらいのです。無反応むはんのうというか、ただ時間の過ぎるのを待っただけというか……喜劇きげき狂言を演じえんじていて、無反応ほどこわいものはありません。

一方、先ほどのそうぞうしい学校、最初はまったく見てなくても、楽しい場面、おもしろい場面、じよじよにじよじよにこちらに目が向いてくる。そして大声で笑う。手をたたいて笑う。最後には会場を走り回っていた子どもも、声を出して笑っている。そんな子どもたち、次の授業じゆぎやうが始まるうとしているのに、校門の所まで送ってきてくれて「おもしろかったで！ また来てな！」

胸むねが熱くなる。来てよかった……と。

この子どもたちの一言が、ぼくを今も学校に向かせ、狂言の楽しさを感じてもらおうようにと、動かしてくれているようだ。



正確せいかくに上手じょうずにしゃべりたいと思った。例えば、近所きんじよに使いに行くとき、用件ようけんの伝え方を練習しながら行く。

「こんにちは。」とあいさつしたあと、「これを届けとどにきました。」とまず言おう。すると、おばさんが、「なに？」と問うだろうから、「父の旅行のおみやげです。」と続けよう。「お父さん、どこへ行ったの？」と聞かれるかな。ええっと、父はどこへ行ったのだったか。「知りません。」と言ったらきつと笑われるだろうなあ。引き返して父の行き先を確かためてこようか……。

このような具合ぐあいなので、使いのとちゅうでぐずぐずしてしまふ。座りすわこんで、ああ言おう、こう言おうと考えていると、母に見つかってしまい、「お前はまたぐずぐずしているのか。ちゃんとお使いにも行けないのか。」とむりやり連れて行かれるの



坪内つぼうち
稔典ねんでん

だった。もちろん、使いの口上くわしやうがちゃんと言えるわけがない。もたもたしている、母は、「この子は口べたで使いもまだちゃんとできませんのよ。」とおばさんなどに弁解べんかいする。わたしは消え入りた気分。そのころ、わたしは四国しこくの半島の村の小学生だった。

母はやさしくて前向きな人だった。無理に使いをさせたのも、息子むすこがちゃんと話のできる子になるように、という心づかいであつたろう。だが、この母の心づかいだけは、わたしに苦い思いを残した。母の期待にこたえて、正確に、そして早くしゃべろうとしたわたしは、そうしようとすればするほど、口ごもってしまい、考えこんだ。無口で口べたになった。

以上のような状態じょうたいが最も強くなったのが五年生のころだった。友達ともだちとはともかく、年上の人や知らない人と話すことがとても苦手になった。何かをしゃべろうと考えているうちに、もうその話題が終わってしまい、わたしはその場の話から取り残されてしまうのだ。それで、この子は無口でおとなしい、と言われるようになった。

無口なわたしは、学校の花だんの世話が楽しくなった。草を引いたり、花に水をやっている、なんだか草花と話している気分になった。草花とは心が通じて、わたしは花だんではのびのびとふるまえた。仲間と遊ぶよりも、一人ひとりで花だんにいる時間が多くなった。

そんなわたしの様子を見ておられた下先生あしたしが、ある日、八木重吉やぎしげよしの詩集をくださった。「声に出して読んでごらん。」とおっしゃって。わたしは海に見える屋根に登って音読した。屋根のその場所は

わたしの気に入りの特等席であった。

雨は土をうるおしてゆく

雨というもののそばにしゃがんで

雨のすることをみていたい

これは「雨」という詩だが、音読すると、雨のそばにしゃがんでいる気になった。自分が雨の世界にきているようで、それが実に快いのだった。

Ｔ先生はいろんな詩集や歌集をしようかいてくださった。日記や詩を書くこともすすめてくださった。話すことが苦手になり、言葉がきれいになっていたわたしだが、詩や物語の言葉にはひかれた。そこでは言葉が別世界を作っていた。色が作る絵の世界、音が作る音楽の世界に似たものが詩や物語の世界であった。

六年生になったとき、こんどは担任の○先生が、「季寄せ」をくださった。これは俳句の季語を集めた小さな本だ。先生は、俳句を作る人はこのような季語集を手にして吟行する。きみらも吟行してみたら、とおっしゃった。どこかへ出かけて、見たものをもとに俳句を作るのが吟行だ。わたしたちはさっそく近くのいそに出かけて吟行のまねごとをした。どのような句を作ったのか、はつきりとは覚えていないが、例えば次のような俳句であった気がする。

春の海沖おきには白い船ひとつ

ゆらゆらとアオサがゆれる春の磯いそ

五七五音の言葉でスケッチするとか、絵をかけばよいのだ、とO先生はアドバイスしてくださった。これがわたしの俳句初体験であった。わたしたちは、いその大きな岩いわに座り、作った句を見せ合った。「ここはこうした方がよくなるよ。」などとたがいに直したりもした。

もっとも、俳句を作ったのはそのときだけで、それからしばらく、わたしは俳句を忘れていた。再び俳句を作るようになったのは、大学生になって日本文学の勉強を始めてから。俳句の歴史などを学びながら、こんどは専門的に俳句を作るようになった。

ところで、今なおわたしは無口で口べた。ちゃんとしやべろうとしてついついおくれをとってしまふ。だが、今では言葉のもう一つの力を知っている。それは世界を作る言葉の力だ。その力が無口なわたしを支えてくれている。では、大人になってから作ったわたしの俳句をしようかいする。できたら声に出して読んでほしい。

三月の甘納豆あまなつとうのううふふふふふふ

行きさきはあの道端みちばたのねこじやらし

たんぽぽのぽぽのあたりが火事ですすよ



▲演奏する筆者（写真右）

12 感動する心、熱中する心

鈴木 俊哉

みなさんは、音楽をきいて感動したことがありますか？

わたしたちの周りにはいろいろな音楽があり、毎日のように音楽をきいていますが、心から感動できるような音楽にはなかなか出会えないと思います。わたしの仕事はリコーダーを演奏したり教えたりすることで、演奏会場だけでなく学校にも行くことがあります。一度、こんなことがあります。それは、台湾の小学校に行ったときのことです。二十人くらいの子どもたちがリコーダーを持って並んでいました。まずおどろいたのはその子たちの楽器の持ち方でした。楽器というのは長



◀学校での子どもたちとのふれ合い



年演奏していると、あたかも自分の体の一部のようになってきました。それは、楽器の「持ち方」にも現あらわれてきます。その子たちは、自分の体の一部であるかのようにリコーダーを持っていました。そして演奏が始まると、とてもすばらしく、感動のあまりなみだがあふれてきました。人間は、悲しかったり、うれしいときだけではなく、大人おとなになるにしたがって、深く感動したときにもなみだを流します。みなさんも、感動する心さえもっていれば、いつかなみだあふれる自分におどろくことでしょう。

みなさんと同じ小学生のときに、わたしもリコーダーをふき始めました。リコーダーにもいろいろな音楽があることをおじから教わり、ふくことに夢むちゅうになり熱中しました。日本で勉強するだけではあき足らず、遠くオランダにまで勉強に行

きました。

ところで、外国にいると周りは日本人ではありません。そのため、自分は日本人であるということ、日本にいるときよりも強く意識いしきします。リコーダーでは、バッハとかヘンデルといったヨーロッパの曲をおもに演奏えんそうしますが、あるとき、「自分は日本人なのにどうしてヨーロッパの音楽を演奏しているのか。」と、考えるようになりました。それまでは、ヨーロッパの音楽があたかも「自分の音楽」であるかのようにかんちがいでいたわけです。けれども、日本の音楽は日本の音楽であるし、ヨーロッパの音楽はがんとしてヨーロッパの音楽なんです。それに気がついた後は、演奏を通しての自分の進路が見えてきて、今は新しい音楽をたくさん演奏しています。

さて、演奏家としてやっていくのにいちばんたいせつなことはどんなことだと思いますか？ 上手じょうずに演奏することでしょうか？ 演奏や音楽の知識ちしきもたいせつですね。人前で演奏するためには目立ちたがり屋でなくてはなりませんし、ほかの人と同じではだめですから、人とちがうことをしたがる心も必要です。また、自分はうまいはずだと思えるうぬぼれる心も必要です。しかし最もたいせつなのは、感動する心を持ち、演奏に夢中むちゅうになれることだと思います。ご飯を食べることよりなによりも、熱中してしまえることです。みなさんは、遊びに夢中になりますね。時間が経たつのも忘れて遊びに夢中になったことがだれにでもあると思います。人間は、この「熱中する心」をもっていきます。遊びは一日で終わってしまうかもしれませんが、もっと長い間、何年も何年も夢中になれ、やればやるほど



おくが深いこと。そんな何かにみなさんもきっと出会えると思います。

木版画であらわす日本の美

木田 安彦

アメリカで製作された『ラスト サムライ』という映画が評判になったことがあります。ストーリーは江戸から明治へと時代が変わったころの日本を舞台にしています。わたしはこの映画を見たとき、長年頭のなかでモヤモヤしていたものがすっきりした気がしました。映画の中で、明治天皇と思われる帝が語ります。「わたしの望みは強くそびえ立つ近代国家をつくること、そのための西欧の科学や技術は手に入れた。しかし、日本人であることを忘れてはならない……この国の歴史と伝統を。」外国映画で言われてわかったなどというのは情けない話ですが、簡単な言葉でありながら実に明快で、現代の日本でこそ大きな声で言わねばならないことではないかと共感を覚えたのです。

わたしは、初孫として生まれ、また男の一人っ子でしたので、小さいころから家のしきたりを厳しくしつけられました。毎朝のお仏飯の上げ下げは男の子であるわたしの役目でした。祖母に連れられて、朝早くから弘法さんの御影堂へお参りし、毎月一日には母のお供でお稲荷さんのお山めぐりをしました。年末には、仏具みがきや仏だんの清そうをさせられ、本願寺のすすはらいにも連れて行かれました。ねむいし、寒いし、しんきくさいし、しんどいし、どれもいやでたまらず、当時は祖父や祖

母をおにのように思ったこともありました。しかし今になれば、その厳しいしつけや日常の習慣が、現在のわたしをつくってくれたとありがたいと思っています。周囲の大人へのおそれと、げんしゆくな場所でのきんちよう感から、知らず知らずのうちに手を合わせることを学び、祖先を敬い感謝する心を自然と身につけることができたと思います。京都の生活そのものが、日々美しいものを見る目を養ってくれ、わたしを美術の世界へと導いてくれたものと思います。そしてわたしが知るこの国の歴史と文化のすばらしさを、わたしなりに少しでも次の世代の人に伝え、また新たに創造していくことがわたしの使命と考えています。



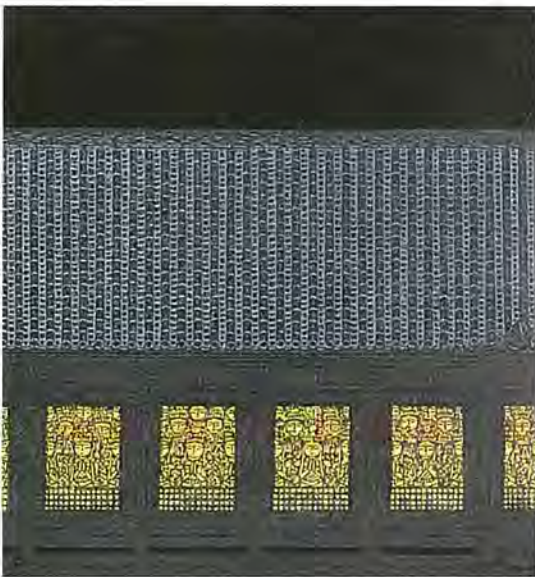
▲弘法さんと親しまれている東寺の御影堂

祖父の亡くなった年れいとなった今、わたしはかつての時代を、古き良き時代で終わらせてはならないと考えています。明治以後どっと流れこんだ欧米の文化、ことに第二次世界大戦後のどとうのように流入したアメリカの文化は、それまでの日本人の価値観を根底からひっくり返すものでした。そして日本の良さを忘れた中途半端な欧米志向型の風潮は、社会を混乱させ、その結果、従来の日本の価値観が確実に失われてきたのが現代ではないかと思えます。子どもたちから洋風の生活様式で育った世代が増え、町は一見するとこの国の人かわからない人々や光景で満ちあふれています。

美術の世界でも同じことが起きています。どこの国の人の作品かわからない作品がもてはやされ、はんらんしているのです。ほんとうの意味での国際性とは、その国の独自性をもつものであると思います。その国の伝統の精神をふまえた延長上に、新しい創造と表現によって制作されたものこそ、真の現代美術だとわたしは考えます。日本人の作品はだれが見ても日本人のものだとわかる作品づくりにこだわりたいのです。

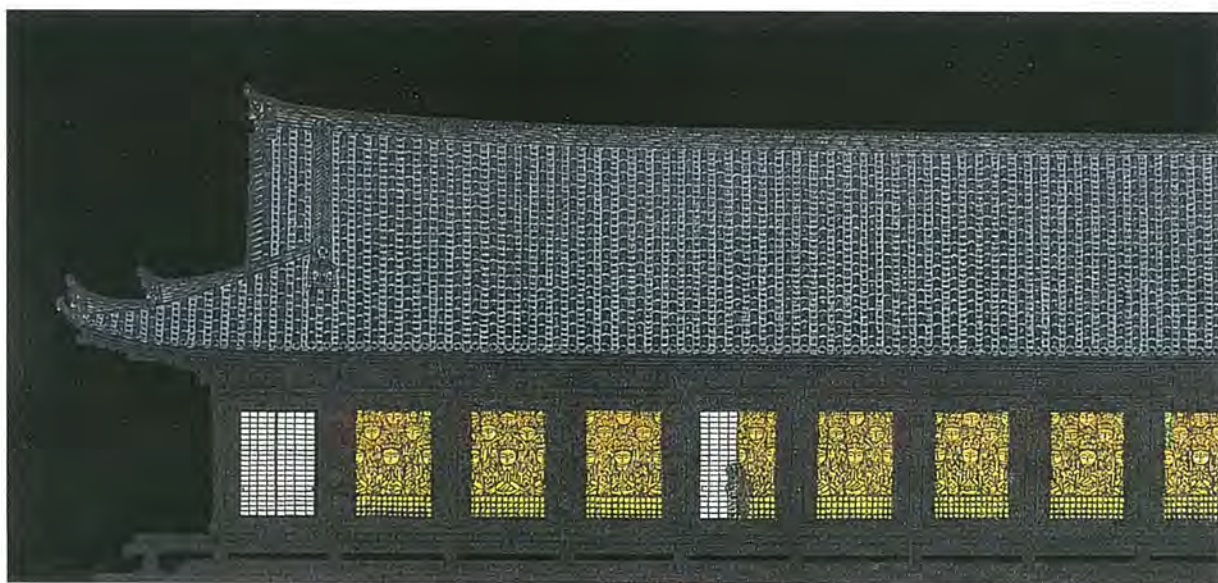
こうした考えのもとに、わたしは自分の生まれ育った京都や、若いころから日本のすみずみまでめぐった旅で経験したことを作品にしてきました。わたしがえがくのは、風景の美しさばかりでなく、人と人の交わりによって生まれる感情や日々の営みの美しさ、すばらしさといったものです。これらを表現するのに最も適した絵画の技法が、わたしにとっては木版画でした。わたしは水墨画や油彩、ガラス絵などさまざまな技法でも絵をかきますが、すばらしい切れ味をもつ伝統的な日本の彫刻刀で版木をけずり、手すきの和紙に摺る木版画という技法によって、わたしがこだわる日本の美を表現できるように思うからです。

わたしは学生のころから、よく仏像をモチーフにしてきました。しかし、それは仏教を深く信仰しているからというわけではありません。子どもたちの日常生活や、地藏盆で大きなじゆずを回しながら百万遍を唱えたりした伝統行事を通じて、いつ



のまにか仏教になじんだのです。『三十三間堂』^{さんじゅうさんけんどう} はわたしの代表的なモチーフの一つですが、これは今日わたしたちが目にする「三十三間堂」ではありません。わたしが子どものころは、門もへいもなく、だだっ広い庭に建つお堂は、とてつもなく長大に見えました。わたしの『三十三間堂』は、少年期に受けたその強い印象を伝えたいという想いをこめた作品なのです。

近年、近隣アジア諸国の文化の流入も増えつつあり、日本の生活習慣はますます多様化することでしょう。良いことはいくらかでも取り入れればいいのです。しかしそれは、この国の歴史や文化をたいせつにし、日本の心をもった上であってほしいと思います。今の時代に育つ子どもたちにはほんとうのすばらしい日本の生活、文化とは何かということを伝えたいとき、わたしは自分自身が育ったころの思い出にもどらなければなりません。それを知らない人々にわたしのできる方法、すなわちわたしの作品を通じて考えてもらいたいと願っています。



▲『三十三間堂』作：木田安彦^{きだやすひこ}

美しきふるさと京都きょうと

崔サイ善ゼン今コン



▲京都の町並み

わたしは京都が大好きで、日本に来るなら京都やあと思い、京都に来ました。そして今はちよっぴり京女きょうむんなになりました。京都はわたしの第二のふるさとです。

京都に住んでいるみなさんは京都をどう思っていますか。

毎年、文化都市である京都にあこがれて訪ねたずてくる外国人観光客は約百万人になるそうです。

京都のどこがそんなに魅力みりょくがあるのでしょうか。みなさんもいっしょに考えてみましょう。

まずは、町並みまちなを考えてみましょう。

京都の町並みはわたしの母国である中国の西安シーアンととても似にています。それは千二百年前に京都は西安をまねしてつくったからです。しかし、西安よりもっとすぐれたところもありますよ。例え

ば、町の名前の由来も意味が深いし、わかりやすく整備されているところですよ。また、遊び心で歌いながら町の名前を覚えるのもおもしろいですね。「丸竹夷二押御池……」。

次は、日本文化の中心である京都を考えてみましょう。

みなさんも知っているように、京都には茶道、華道、舞踊、能楽、着物など……さまざまな文化がかがやいています。

みなさんは何かおけいこをしていますか。なんでもいいですよ。

わたしは裏千家で六年くらいお茶を学んでいます。そして茶道からさまざまなことをたくさん学びました。例えば、歩き方や正座、あいさつやきれいな日本語、着物の着付けやおかしの種類などたくさんあります。

みなさんは「一期一会」という言葉の意味を知っていますか？

お茶の世界で、この「一期」という言葉に続けて「一会」といわれるのは、自分の生がいにとって今日の出会いは二度とない機会である、という真けんで新せんな気持ちで茶会に臨むべきだ、という心構えを示すものと言います。たとえ何度も出会ったことのある人同士であっても、きよくたんに言えば、毎日朝から晩まで顔を合わせている家族や友達であっても、茶の湯の席を設けたからには、おたがい初対面であるかのように、そしてこれからも二度と会うことがない対面であるかのように、こころ身の力をこめ、真けんな気持ちで接待をし、会話をするとのことのようですよ。

お茶を体験してみれば、「思いやりの心」「人をもてなす心」、おたがいに「ちようだいいたします。」とか「お先に。」など、きちんとあいさつをすることを自然に理解しながら身につけることができず。みなさんもぜひ体験してみてくださいね。

最後に、国際人とは何かを考えてみましょう。



き おんまつり
▲ 祇園祭

「英語ができれば国際人になれる。」と書いていますか。あるいは、「イギリス人のマナーをまねすれば、フランス人のファッションをまねすれば国際人になれる。」と書いていますか。

実は世の中にはそんな考えの人がいっぱいいるのです。では、みんな国際人でしょうか。

わたしはそうは思いません。自分の国の文化を深く知って国際的な場で活やくできる人こそがほんとうの国際人だと思います。

もちろん英語などほかの国の言葉を話せるのも大事なことですよ。けれども、何かそういうと道具にひびきするだけの内容ないようを同時に考えなければならぬのです。例えば、「お茶」だったなら「お茶」のスピリットをもった上で英語力を身につけることです。つまり、国際人になるためには、まず日本人でなければいけないということです。

わたしみたいな外国人が日本文化を好きになったり、学んだりしていますので、日本人であるあなたは、生まれたときから自然に身につけているものをもたいてつにしているはずだし、上手じょうずだと信じています。

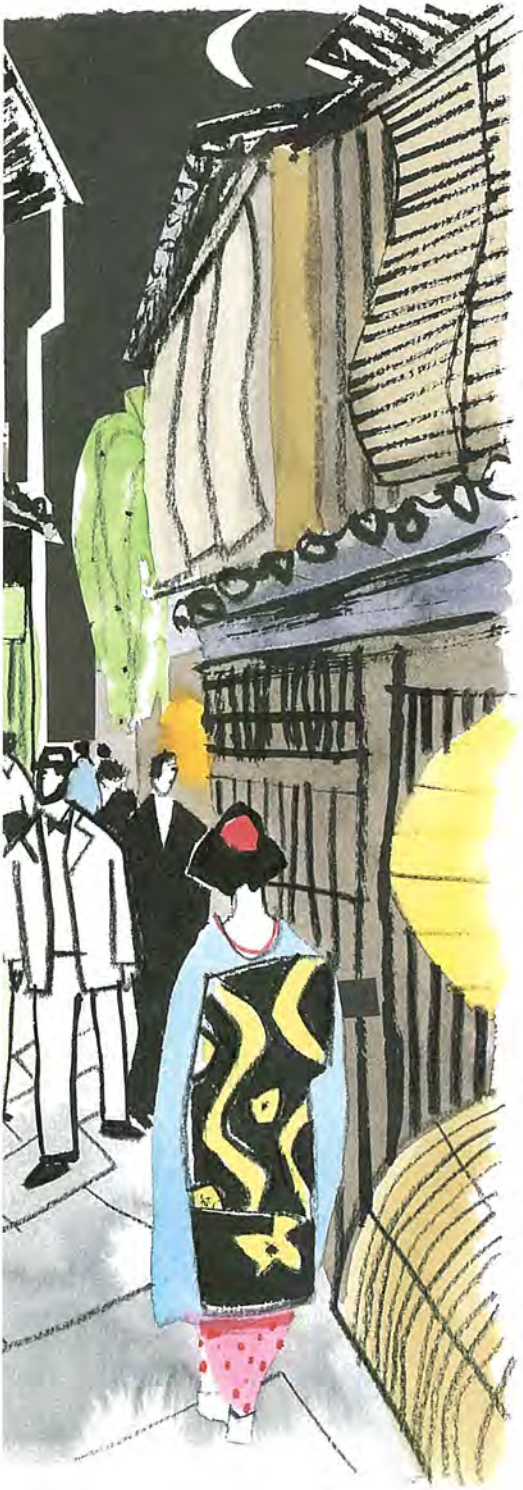
日本人の心のふるさとである京都きょうとは、これからもみんなに愛され、世界でかがやいていくと思えます。そして、歴史の街だけではなく先端技術せんたんぎじゆつの発信の地でもあります。しかし、これらをたいせつに守りながら継続けいぞくし、発展はつてんさせていく担に手は、あなたたちしかいませんね。

みんなが大好きなふるさと京都をこれからももつと愛していきましょね。

わたしが出会った日本

ドナルド・ロキーン

わたしが日本に初めて住むようになったのは、昭和二十八年、今から五十年以上前のことです。長く激しい戦争が終わってから、まだ八年、しかし幸運なことに大きな空しゅうを受けなかった京都には、昔の美しさが残っていました。初めて京都に着いたのは、八月の日の早朝です。飛行機で東京に着いたわたしは、そのまま夜汽車に乗って京都に向かったのです。京都駅で友人にむかえられ、金閣寺の近くにあった、かれの家に行きました。そして、その晩、友人に連れられて夜の町に出かけたわたしは、生がい、忘れられない経験（けいけん）をします。わたしが見たのは古い町並み（まちなみ）がそっくり残っていた先



斗町とちやうでした。あてやかな着物を着た舞妓まいこさんがゆっくりと歩き、かみをかざるかんざしには町の灯がかがやいて……外国から来たばかりだったわたしは、夢の世界にまいこんだと思ったほどです。



京都に暮らし始めたわたしは、京都の人々、そして日本人の勤勉な態度に強い印象を受けました。世界の国々には、なんとか手をぬいて仕事を楽に済ませたい、そう思う人が少なくありません。しかし、わたしが見たのは、どんなささいな仕事にも全力をつくす人々の姿でした。京都の町角のいたるところ、また日本じゅうのあらゆる町で、それぞれの仕事を立派りっぱにやりとげる人々を見て、この国、日本は必ずや復興かっこうするとわたしは確信かくしんしました。そして、その確信はまちがっていませんでした。戦争が終わったとき、空しゅうで破壊はかいされた日本が元通りになるには、少なくとも五十年はかかる世界じゅうの人は思っていたのに、日本はきょうう的な早さで回復かいふくし、やがて世界で最も栄えいする国の一つとなったのです。それほど短期間に復活をとげたのにはいろんな理由が上げられますが、なんと言っても日本人が一生けん命めいに働いたことが最大の理由でしょう。

みなさんも後十年もすれば、実社会に出て行かれます。十年もしないうちに働く人もいるでしょう。

わたしがみなさんに伝えたいのは、どんな職業しごくに就ついても、最善さいぜんをつくして欲しいということです。最初は給料が安かったり、たいくつな仕事だったりすることもありますが、それでも、なおかつ全力をつくしてください。どんなにつまらなくみえる仕事にも重要な責任せきにんがあり、世の中の一部として欠かせない役目があるからです。もし、給料の安い仕事、つまらなくみえる仕事に就いたとしても決してはずかしく思う必要はありません。世の中には、あなたの仕事を必要としている人が必ずいるからです。不思議なことに人々が全力で物事にあたると、思いがけない可能性かのうせいが開けます。世の中を変える偉大いだいなアイデアとは、一見いっけんたいくつな仕事のなかにうもれていることが多いのです。まるでいたずらっ子のように、簡単かんたんに見つかるもんかと、わざとたいくつな仕事のなかに身をかくしているのかもしれませんが。そもそも人はどうして働くのか。それは生活をするためであり、幸せな人生を過すごすためです。しかし、幸せを求めるだけではなく、一人一人ひとりが心のなかで、自分こそが、より良い世界をつくる人間になるのだと思うことが大事なのです。

それから最後に言葉の話をしておきましょう。わたしたちがふだん、何気なく使う言葉には、実はたましいが宿すっています。目には見えなくとも、一つ一つの言葉には、日本人が先祖せんぞ代々だいたいから育そびてきた文化の結けしょうがこめられているのです。大昔に日本に生まれ、死んでいった過去かこの人たちと現代ごんじのわたしたちを結ぶカギが日本語という言葉です。もし、大昔の人がタイムマシンで現代に来て、

きたない日本語が使われているのを耳にしたら、きっと不快な気分になるはずですよ。今とはちがう世の中、けん命に生きた人たちに感謝の念をいだきながら、ふだんの生活でも、きれいな言葉を使うように心がけましょう。目に見えるものをきれいにすることはたいせつです。しかし、心や言葉のように目に見えないものをきれいにすることは、さらにたいせつなのです。

言葉に宿るたましい、これを言霊と言います。悪い言葉を使えば、言霊はよごれ、わたしたちのたましいはつかれていきます。逆にきれいな言葉を使うと、一千年をこえる歴史をもつ日本という国のたましいが、支えとなってくれます。きれいな言葉で話すのは、はずかしいという人もいます。でも、自分ももう、一人の人間だという自覚をもって、ていねいな言葉で話してみると、きっと心のなかに新しい世界が開けることと思います。





▲ワシントン D. C.の国立大聖堂ディーシー こくりつだいせいどうにおける平和祈念献茶式きねん(平成18年4月)

16

日本で育ちゆくきみたちへ

せん げんしつ
千 玄室

わたしは「一盃いちわんからピースフルネス」の理念をかかげ、お茶を通して二度と戦争が起こらないよう、世界六十数か国で平和をいのる献茶式けんちやしきを行ってきました。かつて、ノーベル文学賞を受賞された川端康成先生かわばたやすなりは、「日本人は昔から月を喜び、花を愛する国民です。」と、世界各国の記者団だんに語られました。当時、わたしは、この言葉はまさに「茶の心」を表すものと感激かんげきしました。「わび」とか「さび」という言葉は、日本人でさえも的確てきかくに理解りかいできない。その難しい言葉むずかを外国人にわかりやすくつましく表現ひょうげんされたのです。



▲茶道を通じた人々との交流

「美しい国、日本」

四季折々の自然に育まれた日本の伝統文化は、日本の美を象徴しょうごうしており、世界にはこれるものです。

わたしは、世界のあちらこちらへ参りまして、いつも思うことは「日本に生まれてよかった。」ということです。当然、日本人ですからそう思うのはあたりまえです。

しかし、最近では、日本人でありながら、日本の歴史や伝統のなから育まれた日本のよさを自覚していない方々を海外で見かけます。

特に目的もなく、さまざまなものを見聞きするのも一つの生き方ですが、それだけで終わってしまっただけではあまりにももったいない、というのがわたしの主張しゅちやうです。日本の若い人わかは、もっともつと自分の国を熟知じゆくちして、日本の美しいことを身につけ、そして外国へ行って多くの方々と接せつすることができれば、たいへんすばらしい交流の輪が広がります。

言葉がでなくても、例えば一盃のお茶を点たてて差し上げるこ

とを知っていれば、それだけでも心のつながりができます。

日本では、戦後、あらゆる面でもの見方や考え方が変わり、昔からある日本のならわしが「古いききたり」として受けとめられ、本来のよさが十分理解されなのまま置き去りにされてしまうことが多くあります。

しかし、日本から失われつつある「まほろば（すぐれたよい所、国）」や和わの関係、対立ではなく、人と人とは「の」の関係で結ばれる心の和を取りもどすことが、これからの社会にとって何よりも必要なことです。

一つの例をあげるならば、「わたしの先生」「先生の生徒」というときの「の」という言葉は「和」です。人と人をつ結びつける言葉です。昔は家庭に、「親の子」「子の親」であるという「の」の関係がありました。

それが、戦争が終わって、民主主義みんしゅしゅぎの考え方をまちがえてとらえてしまい、「の」のぬくもりが消えて、「と」という対立した考え方になってしまったのです。

「社会の(中の)自分」と、二つが一体であったのが「社会と自分」と別々になってしまいました。家族のきずなが失われて「親と子」になってしまうなど、ぎすぎすしたみずくさい人間関係になっているのです。これまで一体感をつくってきたのは和です。

「の」の関係をもつことで、和の関係をもう一度つくってほしいのです。

「美しい心の国、日本」

こんなにはばらしい言葉はありません。仕え合うと書いて仕合せしあわせ、幸せなのです。幸せ、仕え合うとは、老若男女ろうにやくなんによ、みんながおたがいに仕え合いをするという意味です。

わたしは母から「あなたは家元いえもとになっていく人。言葉の情けなさと、人の情けを忘れてはだめですよ。」と教えられました。今でも母の言葉が聞こえてきます。「あなたはそれでよいのか。」という母の厳しい言葉が聞こえてきます。言葉の情け、人の情け、それはおべんちやらではいけないのです。心から人様ひとさまに対して、「いかがですか。お元気でですね。」と言えることによって、自分も幸せになることができます。そういうことをもつともつと伝え合うことが、わたしたち人間にとってたいせつなことではないでしょうか。こうしたことさえできずに、世の中をよくしていくことは無理です。

まず、心底、相手の立場に立って考え、人の情けに気づく心の美しさこそが必要です。

美しい心の国、日本とは、相手の気持ちをくみとろうとするわたしたちの心によって引きつがれていくものだと思います。



心の広場

◇ 心に残った学習

◇ 真^{しん}けん^{けん}に考えたこと、大事^{だいじ}だなあと思ったこと

☆ 今までのわたしについて思っていること

きみも身につけよう 社会のマナーやルール

府民ほっとメッセージ(1)

わかってる？
優先座席の
ある理由を



思いやり
世界に通じる
語学力



環境の
問題について
考えよう



あいさつは
コミュニケーションへの
第一歩



きみも身につけよう
社会の
マナーやルール



ほんとうのおしゃれを
したいと思うきみ
社会のマナーとルールが一步



きょうも
あなたが元気で良かった
そんなことが
わたしの幸せ



ルールやマナーは
自分のためにあるのよ
守る自分自身が
こちよい!



きみも身につけよう 社会のマナーやルール

すみませんと声をかければ
すみませんと
道をあける子どもたちの群れ



あたたかな思いやりで
こころ豊かな 社会にしよう



ポイ捨てを
あなたもやめて ごみ拾い



行動に 移す勇気を
まずもう



あなたのメッセージをここに書きましょう

Blank area for writing a message, outlined in blue.

Blank area for writing a message, outlined in red.

第二部

第二部は、みなさんと同じ京都府きょうとふの小学生が夢や願いをもって、自分のことや周りのことについて書いた作文をのせたページです。

*また、それぞれの作文に対して、「応えんメッセージ」おうえんが寄せられています。

第二部のあとは「府民ほっとメッセージ」のページです。
みなさんを見守り、はげますために届けられた府民のみなさんの声をしようかいしています。



▲みどりキャンプが行われている「けいしぜんこうえんるり溪自然公園」

1 みどりキャンプとわたし

「みどりキャンプ」

それは、体の不自由な方とわたしたち小学生が、いろいろな体験を通してふれあいを深めることができる、そんなキャンプなのです。

体の不自由な方と、どんなふうせつに接していけばいいんだろうか。一週間もテント生活を続けることができるだろうか。けれど、そんな不安よりも今までけいけん経験したことのないことにチャレンジしたいという気持ちが大きくなり、キャンプへの申しこみを決心したのです。

このキャンプでは、すべての活動を参加した人の方だけで行っていきます。料理は、火をおこすことから始め、自分たちで食材を切ったり、



▲▶みどりキャンプでの
ふれ合い



調理しなければ食べることができません。テントづくりや洗せんたくなど、初めての活動ばかりで、わたしにとってはとてもたいへんな毎日でした。体の不自由な方に、進んで話しかけたりもしたけれど、わたしのいうことを聞いてくれなくて、どう接していいのかわからなくなりました。

そして、最後の方は、あまり話をすることもなくなってきました。キャンプファイヤー、スタンプリアー、カヌー体験などの楽しい活動の中で、スタッフの人たちのやさしさを感じながらも、自分のなかではもう少しこうすればよかった、という思いの残るキャンプとなりました。

それから一年。

五年生になった今年も、みどりキャンプのパンフレットが配られ、わたしは、迷うことなく申しこみました。今年は、体の不自由な方に去年よりやさしく接していいこう。そんな気持ちでキャンプに参加しようと思いました。

待ちに待ったキャンプの当日、

「去年も来てたんやろ。今年は、期待しているから！」

と、スタッフの人が声をかけてくれました。そのとき、わたしは、去年は教えてもらってばかりだったけれど、今年は、人の役に立ちたいと心から思いました。

ある日、※ようご養護学校の友達ともたちが食器を洗いにくそうあらいにしているのを見て、わたしは、勇気を出して、

「食器洗い手伝てつだうわ。」

と、声をかけました。すると、

「うん。」

と、返事が返ってきて、

「じゃあ、次は、これね。」

と、言いながら二人で洗いました。わたしは、自分の心のなかが温かくなっているのを感じました。このときの養護学校の友達えがおの笑顔えがおを今も忘れることはできません。

このキャンプを通して、わたしは、養護学校の友達と心がふれあった喜びと人のために働くことのすばらしさを知ることができました。

※養護学校……盲学校・聾学校及び養護学校は、学校教育法の改正にともない、平成十九（二〇〇七）年四月一日から、特別支援学校となりました。

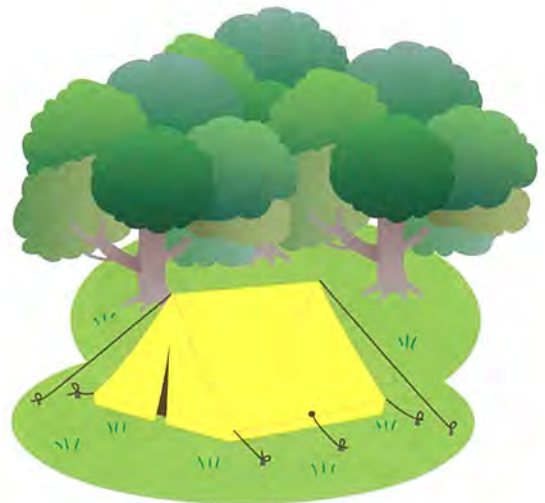
応えんメッセージ

やまもと けんいち
山本 兼一

人の気持ちになって考えるのは、実は、とても難しいことです。特に、健全な人が体の不自由な人の身になって考えるのは、大人でもなかなかできません。

みどりキャンプが、よいきっかけになりましたね。前の年に、うまく接することができなかったことが残念で、それが心のバネになって、今年は一歩ふみこめたのでしよう。

無理に何かをいっしょにしようとしても、気持ちは通じません。人と人がわかり合うには、時間がかかります。ゆっくりとおたがいにわかり合う努力をしましょう。人の気持ちがわかるようになれば、それだけあなたの気持ちも、大きく豊かに広がるはずですよ。



2 弟の入院

十二月三日から、弟の勇二が入院していました。ぼくは、その間、お父さんと二人でした。勇二がいけない家は、とても静かで、しーんとしていました。冬休みに入っても勇二は退院できず、ぼくは、お母さんの実家の祖母の家にとまりに行きました。

病院に行くと、勇二が元気になっていたので、ぼくはほっとしました。でも、お母さんに聞くと、だいぶ元気になったけれど、まだ状態は良くないらしいと、言っただけだったので、ぼくは、なぜ状態があまり良くないのに、あんなに元気でいられるのだろうと思いました。

ある日、お母さんが、「勇二があんなに元気で笑っているのは、お兄ちゃんが来てくれた日だけやで。ふだんはしんどそうにねていて、ぐったりしている感じやで。たぶん、お兄ちゃんが来てくれるのがうれしいんやと思うで。せやから、勇二のところに来てあげてや。お兄ちゃんが来てくれるのが勇二にとっていちばんの薬やと思うから。」と言わりました。ぼくは、その言葉を聞いて、そうだったんだ。あんなに元気そうにしている勇二はいつもはぐったりとされていて、日に日に弱っているのかと思いました。そして、それ以来、おじいちゃんのごうがつけば、病院に行くようにしました。いつ



しよにいてあげるだけで、勇二は元気になっていきました。

そして、先生から、十二月二十七日に退院してもいいよと、言ってもらい、退院することができました。この日は、勇二の誕生日だったので、勇二は誕生日を家で過ごさせてよかったと言っていました。ぼくは、あらためて弟や家族のたいせつさを知りました。家族が一人欠けると、家がさびしくなり静かになります。だから、家族は全員がいてこそ家族で、家族はチーム、すなわち一人が欠けると何もできないものだと思います。だから、家族はたいせつだなと思います。

だけど、勇二が帰ってきて元の生活にもどると、宿題をしているとき、勇二がじゃまをしてきたりします。「もう、勇二なんていらぬい。」なんて思うときもあります。でも、やっぱり勇二が入院していたときのことを思い出すと勇二はたいせつだなあと思います。ぼくは、家族は不思議だなあと思います。

おっ
応えんメッセージ

さわだ
澤田 淳

「家族って不思議だなあ。」と、弟勇二君の入院をきっかけに家族のたいせつさに気づいたきみはすばらしい。立派だよ。立派だよ。いたずらやじゃまをされて、「もう、いらぬい。」と思ったこともあった勇二君が、とつぜん、入院して家にいなくなると、静かになったけど、きみもお父さんもさびしくなった。勇二君はきみやお父さん、お母さんの宝物。病院でぐったりしてねていた勇二君が、きみが来てくれると笑い、元気になったのは、きみが勇二君の宝物。家族一人一人の宝が集まって大きくなった宝物をたいせつにしたいですね。

3 守ろう環境、守ろう地球

ぼくの「夏休みやったね・エコ体験」は、環境に関することで、新聞の記事をスクラップにし、その記事の感想を書くことにしました。その中で、特に三つの印象に残った記事をしようかいします。

一つは、「酸性雨 原因の大半、国外から」

これは、七月八日付けのある新聞の見出し

です。日本にふり注いでいる酸性雨のもと

となる大半は、国外から飛来しているら

しいのです。その原因の一つであるいおう

酸化物は、中国からたいへん多く運ばれているという調

査結果が出されたので、減らしていく必要があるなど思いました。各国

酸性雨 原因の大半、国外から

京大など推計

日本の国土に酸性雨を降らせ、酸性物質の約80%が国外から飛来している。推計される。京大、同環境研究所などの研究で分かった。

初めて実施された中国、韓国に加え、東アジアの約半分に達する。材料による各国の硫酸化、脱硫酸技術の中国移転、大気移動データなどの対策が急務とい

〇一年かかると推定。時点を推計して一九九五年「東アジアに広がるエア 場」から出る硫酸化、火山のエア、中国49%、日本21%、夫々代表、韓半島、自動車排ガスなどから出る硫酸化物の最終、中国39%、朝鮮半島、報告された。中国沿岸、朝鮮半島、日本39%、その他の20%は、二〇〇一年に日本に降り注ぐ

中国が49%

研究結果は、十三、十四の両日、京都市左京区開かれ、大時計台記念館で「エアロソールの大気環境影響」を報告する。一般参加可。無料。

調査対象する、硫酸化物の排出増の影響で酸性物質は現在より約割増加する結果になった。硫酸化物の中国からの飛来は、過去の国内外の研究では、約32%と推定では、日本の研究者らによって、約49%と見られる。韓半島、東アジアの推計には誤差も大きく、アジアの経済成長、技術移転などに技術の必要では、として

硫酸化物 飛来の65%

▲酸性雨についての新聞記事 (2006年7月8日 京都新聞)

のいおう酸化物を出す工場に、日本はそれを減らす技術ぎじゆつを早く教えてあげたらいいのになと思います。

二つ目は、「エチゼンクラゲ有明海ありあけかいで繁殖はんしやく？」（八月七日付け）

地球温暖化ちきゅうおんだんかのえいきょうで、増ふえているエチゼンク

ラゲが有明海で繁殖しているおそれがあるといっています。

もともと中国の黄海こうかいやその周辺海域かいいきに生息して、これ

まで日本にはいなかったものです。見つかったそのク

ラゲは、ぼくたちがこれまでに目にしたことのあるク

ラゲとちがって、かさの直径が約八十センチメートル、

体重約三十キログラムもあり、さらに成長すると、直

径一メートル以上、重さ百キログラム以上にもなるこ

とを知ってたいへんおどろきました。

しかも、そんなお化けクラゲが、近年、海で働く人

たちをなやませています。漁場に大発生し、あみを破やぶつ

たり、とれた魚の中には、さされている魚も多くいて、

売り物にならないので、大ひ害を受けています。エチ

ゼンクラゲの弱点は、水温十五度以下になると生息で



▲京都府でのエチゼンクラゲの大量出現

きないことなので、なんとかならないかなと思います。

三つ目は、「医薬品、かせん河川を汚染おせん」（七月二十八日付け）

人や動物用の医薬品やせいぶっしつ生物質の成分が各地の河

川をよごしていることがわかりました。ただそれ

が、川をよごしているだけではないのです。

薬は病気を治すことに使われていますが、

実は「毒物」です。ぼくたちの生活に害

をおよぼすだけでなく、かんきょう自然環境を変

えることも予想されます。例えば、

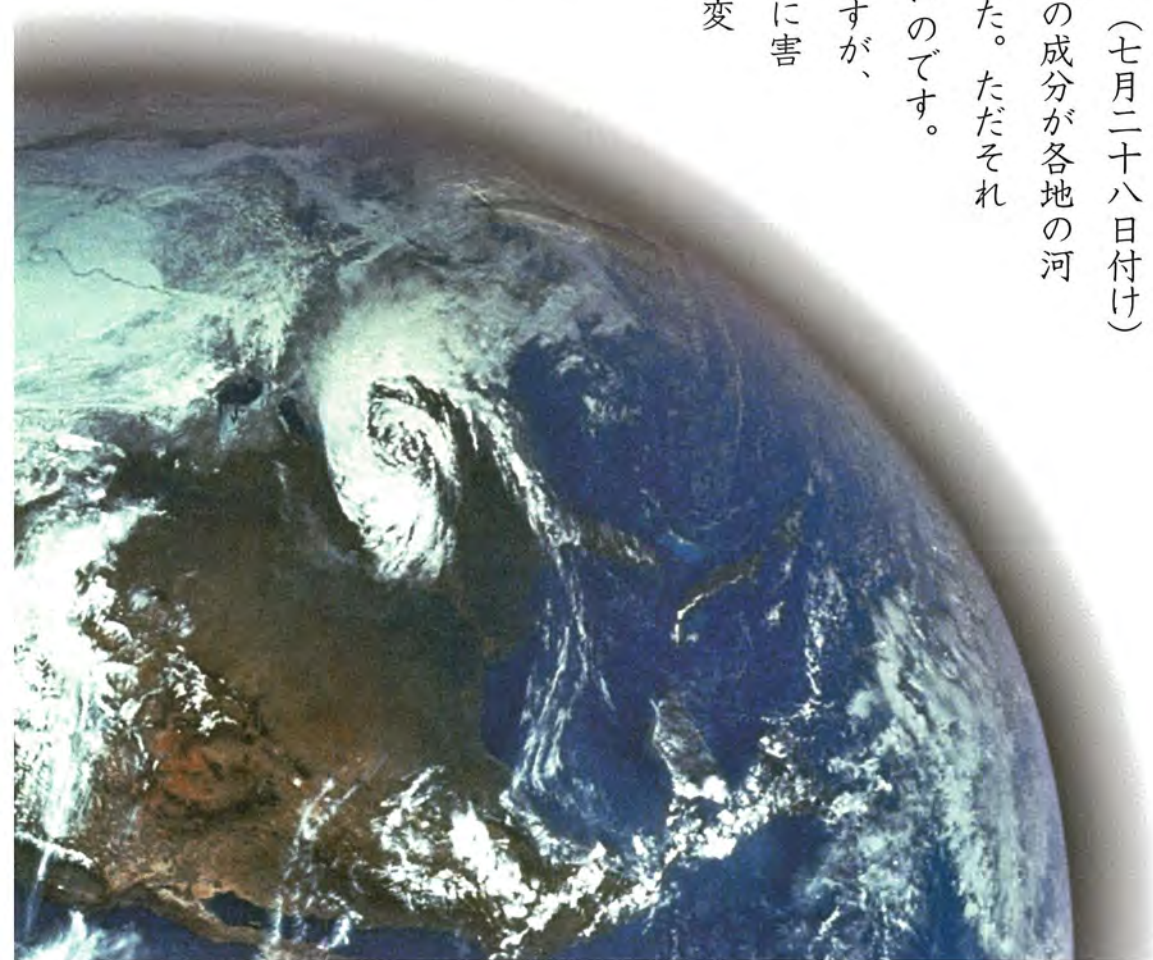
その薬のせいで、ある生物には、

ゆうこう有効だった薬が効きかなくなると

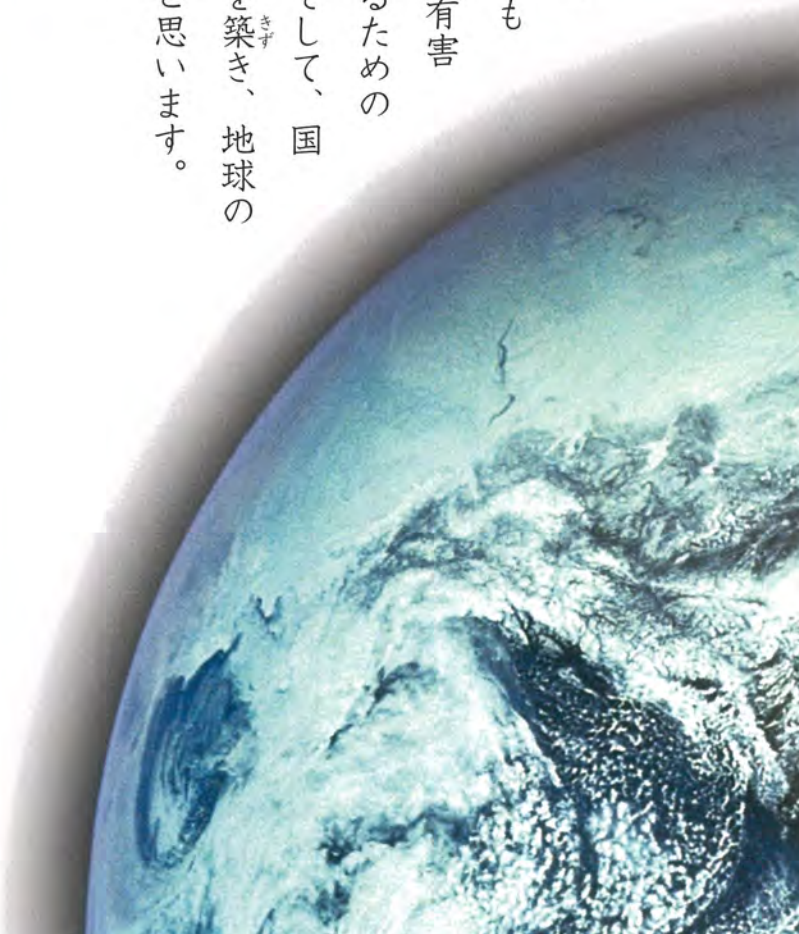
いった悪いえいきょうを与える

ことも考えられます。

この調べ学習を通して、ぼくたちのたいせつな地球が、ほん



▲うちゅう宇宙から見た地球



とうに悲鳴をあげているのが聞こえます。その原因は、すべて人間の手から生まれたものばかりです。今も進められています。これからは、有害になるものを出さないことや処理するためのくふうを考えなくてはなりません。そして、国と国がおたがいに協力できる関係を築き、地球の環境を守っていかねばならないと思います。

「守ろう環境、守ろう地球。」

応えんメッセージ

河合 雅雄

いい着眼です。視野が広くするどい。同感です。環境問題は今や国境をこえ、グローバルです。アジアの国が団結して解決にあたるよう、日本がイニシアティブをとりたいものです。

医薬品による汚染もこわい。家畜や魚の養殖にも使われています。耐性菌の排除はとても難しい。こうした食品は消費者が買わないことですね。「エコ体験」から「エコ行動」へ向かう。



4 あいさつじじい

わたしの家では、必ずあいさつをします。おばあちゃんとかが顔を洗あらっていても絶対自分からあいさつします。お父とうさんとお母かあさんにも絶対します。

なんでかっていうと、おばあちゃんが、「あいさつはたいせつだから絶対言いなさいよ。」って言うてるからです。朝、家族にあいさつしないと気まずくなります。反対に、「おはよう。」と一言声をかけるだけで、気分がすっとさわやかになります。だから、「おはよう。」と「行ってきます。」と「ただいま。」と「いただきます。」と「ごちそうさま。」と「おやすみなさい。」を、家では毎日必ず言います。



わたしの学校でも、毎朝、児童会が中心となってあいさつ運動をしています。児童会本部の人はほとんど毎日自主的に昇降口前に立っています。また、四・五・六年生の学級で一週間ごとに当番を回し、児童会本部といっしよに昇降口前で、登校する人にあいさつをしています。この間、あいさつをしても知らん顔で通り過ぎる人がいることについて学級で話し合いました。児童会本部として一生けん命めいやってくれている友達ともだちが、

「毎朝、がんばってあいさつしていても、あいさつが返ってこない。同じ六年生の友達の中でも無視する人がいる。」

となみだながらにうったえました。

わたしも泣きそうになりました。わたしは、「家ではきちんとしているのに、学校では、ときどきあいさつをしていない。家と同じで学校でもあいさつしなければいけません。まずくなってしまうのはわかっていたはずなのに。はず

かしさに負けてしまっていたなあ。」と改めて、反省しました。

学級の話し合いでいろいろな意見が出されました。

「あいさつは、人と人がコミュニケーションをとるいちばん簡単で身近な方法だ。」

「あいさつをすると元気が出るし気持ちいい。」

「あいさつするのがあたりまえにできる大人になりたい。」

「あいさつをしたときに返事をしてくれるととってもうれしい。反対に、『おはよう。』と返ってこなかったら、なんか気分がすごくブルーになる。」

「あいさつをするのがはずかしいと思っている人がいるけど、高学年があいさつをあたりまえにしていると、全校のみんなにとってもあいさつするのがあたりまえになるのではないか。」

「難しいことを考えるより、わたしたち高学年が下級生に笑顔で『おはよう。』と声をかけることが、この学校を笑顔いっぱい为学校にできるのではないか。」

わたしは、みんなのあいさつに対する意見を聞きながら、「あつ、わたしもそう思った！」と心で思いました。でも、いくら心のなかで思っても、あいさつをしていてくれる人にあいさつを返さないとやっぱり意味がないと思います。

わたしの学級には、「あいさついっぱい学校にしよう。」と、真けんに話し合える仲間が大勢います。わたしはその仲間といっしょに、まずわたし自身からはずかしがらずに笑顔であいさつして

いきたいです。そして、今年ことしは去年よりよい学校に、来年は今年よりよい学校に、高学年がその思いを引きつぐことができればいいなと思います。

応おうえんメッセージ

梶かじ田た 真しん章しょう

あいさつはとても気持ちのよいものです。なぜなら日本語の多くのあいさつには相手のことを思う心がこめられているからです。

「おはよう。」は朝早くからご苦労さまです、「いただきます。」は食物に対して、今からあなたの中のちをいただきます、ごめんなさい、ありがとう、「ごちそうさま。」はあちこち買い物に走り回ってわたしのためにおいしい食事を用意してくださってありがとうございます、「おやすみなさい。」は今日きょうも一日おつかれさまでした、どうぞごゆっくりお休みください、という気持ちをこめる、それぞれが相手に対する思いやりにあふれた言葉です。習慣しゅうかんになると軽い気持ちで言ってしまうですが、あいさつは心をこめて行いたいですね。

5 おじいちゃん、おばあちゃん

わたしたちの学校の近くに、特別^{※1}養護老人ホームが完成、オープンしました。

わたしたち六年生は、四月のしゅん工式からずっと交流を続けています。一学期は、修学旅行^{※2}の報告や七夕コンサート。二学期は、運動会にそば打ち体験、大そうじ。三学期は、百人一首大会や豆まき。年間を通して、楽しい交流をしてきました。また、放課後や休みの日には、自由にユニツトに遊びに行ったりもしています。ユニツトへ行つて、折り紙やあやとりをいっしょにしたり、話をしたり、ときにはおやつをもらったりもします。今ではすっかり打ち解けて、楽しい時間を過ごすことができています。

あるとき、社会科の福祉施設の勉強で、老人ホームにインタビューに行きました。

だれに話を聞こうか迷いましたが、いつも楽しい話をしてくださるゆき子さんに聞いてみよう、「りんどう」のユニットに行きました。

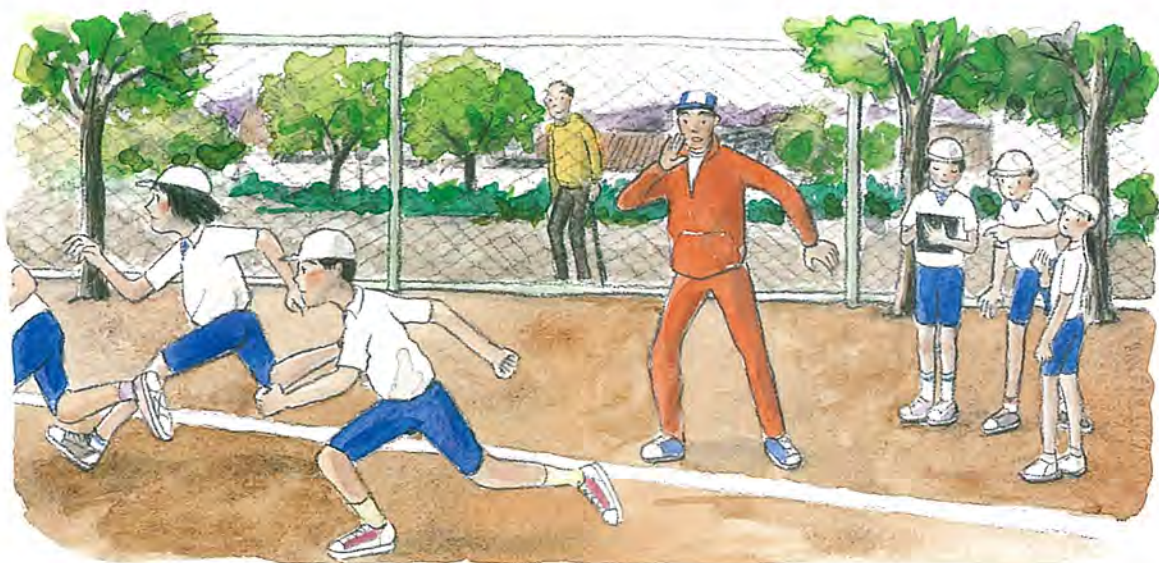
「老人ホームに入所してどうですか。」という質問に対して、ゆき子さんが答えてくださいました。「初めてここへ来たときは、さびしくて、さびしくて、だれの顔を見るのもいやで、ずっと部屋

にこもつとつた。帰りた、帰りたと思っ
て泣いとつた。でも、みんなの声が聞こえ
たとき、部屋から出てみようかな、と思っ
て出てきたんや。それから、みんなに会う
のが楽しみで……。」

わたしは、びっくりしました。いつも元気な
ゆき子さんが、こんな気持ちでおられたとい
うことを、初めて知りました。小浜おばまの人魚にんぎょの話や
宮津音頭みやづおんどを歌ってくださる明るいゆき子さんか
らは、想像そうぞうもできないことでした。確かに、家
族とはなれて知らない土地で暮らすのは心細い
ことだと思えます。ずいぶんさびしい思いをさ
れていたんだと思います。

でも、わたしたちが行くことで、元気を取り
もどされたと知り、なんだかうれしくなりまし
た。わたしたちも交流を楽しんでいます。ゆき





子さんに喜んでもらえるなら、もっともっと交流をしていきたいです。そして、もっともっと元気になってほしいです。

以前、わたしたちが放課後、陸上練習をしているのを見ておられたおじいちゃんが、その三時間後に亡なくられたという話を聞きました。お亡なくなりになったことは悲しいことですが、わたしたちの走る姿すがたを見て、とてもうれしそうにされていたそうです。そして、安らかに亡なくられたそうです。わたしたちの知らないところでも、わたしたちの姿を見て、楽しんだり喜んだりしておられるということを、初めて知りました。わたしたちがいることで、おじいちゃんやおばあちゃんや元氣めいになられるのなら、これからもいろいろなことを一生けん命めいがんばりたいと思います。

おじいちゃん、おばあちゃん、見ていてください。

そして、うんと長生きしてください。

※1 特別養護老人ホーム……六十五才以上の人で、心身の障害のため、常時介護を必要とし、在宅での介護が困難な老人を入所させて養護する福祉施設のこと。指定介護老人福祉施設ともいいます。

※2 ユニット……ここでは、八人のお年寄りがそれぞれの個室をもちながら、台所や居間、お風呂、トイレを共同で使う生活集合体をさします。

応えんメッセージ

松尾 心空

わたしもおじいちゃんです。赤んぼうを見ると、とてもかわいいです。思わずほっぺをさわりたいくなります。小学生の通学姿も、ほんとうに生き生きとしています。このように思えるのは、おじいちゃんたちは、子どもたちの元気が失なわれてきたからだと思います。

元気な姿は、とってもうらやましく、そしてそれを見るだけで、昔の元気が体のなかによみがえってきてうれしくなります。

だれでも、一人でいるのはさみしくてしずみがちな思いになり、友達がほしいのです。お年寄りなら、なおのことでしょう。それが元気な小学生なら、どんなに楽しいことか。ぜひこれからも老人ホームを訪ねてあげるといいですね。

6 人間のかがみ

わたしたち六年生は、社会科の学習で、歴史オリエンテーリングに出かけました。たくさんある行き先の中から、わたしたちのグループは、金閣寺、二条城、清水寺、高台寺を選びました。その中の、金閣寺に行くときのできごとです。

西院で、二〇五番のバスに乗るつもりだったのが、乗客が多くて、わたしたちは乗ることができなかつた。最初は困っていて、次に何番が来るのかを探していた。迷ったまま、適当なバスに乗ったとき、そばにいたおばあさんが、

「生徒さんたち、どこ行くの？」

と声をかけてくれた。このおばあさんのおかげでとても助かったし、

「これから、金閣寺に行くんです。」

道徳の本に出てくるエピソード





と答えると、

「このバスは立命館大学前まで行くから、北野白梅町で降りて、乗りかえた方がいいよ。」

のはくばいちょうお
といろいろ教えてくれた。北野白梅町で降りたときも、

「生徒さん、こっちやでー。」

と呼んでくれた。そして、

「次はこれに乗ったら行けるよ。」

と信じられないくらいに親切にしてくれた。よく、「知らない人にはついて行かない。」といわれていたけれども、わたしはそのおばあさんから悪い心は見えなかった。だから、わたしたちはついて行った。でも、信じられなかった。ほっといたらいいのに、わが子のように話しかけ、親切にいろいろなことを教えてくれた。やっと、バスが来たときも、



「さあ、乗るか。」

と、案内してくれた。おばあさんは、

「わたしは次で降りるけれど、このまま乗っといたら金閣寺きんかくじまで行けるよ。」

と、自分が降りる直前まで親切にしてくれた。

おばあさんが降りたとき、わたしたちは心の底から、

「ありがとうございます。」

と言えた。学校に帰って、このできごとをいちばんに作文に書きたい気持ちだった。こうかいたことは、名前も何も聞いていないことだった。

このおばあさんは、すべての人間のかみだと思った。もう一度出会って、名前も聞きたいし、もう一度お礼も言いたいと思った。

応えんメッセージ

なかにし すずむ
中西進

きみがおばあさんにとても感謝かんしゃしている様子がよくわかります。困こまっているとときに親切にされるのですが、こんなにうれしいのだということ、覚えておきたいですね。

いい文章を書くには、まずほんとうにそう思うことが大事だということにも気づいたはずで、す。ただ、文章の終わりをていねいな表現ひょうげんにするかしないかは、決めておく必要があります。そろっていないと、せつかくのきみの気持ち、読む人にすーと伝わりにくくなります。

7 駅伝大会

ぼくが駅伝大会に出たきっかけは、先生の、

「駅伝大会に出たいと思ってる人、五分休みに先生のところに来てください。」

という一言でした。ぼくは、ほんとうは去年も出たかったのに骨を折ってしまいとてもくやしい思
いをしたので、五分休みに先生のところに行きました。六年生では、明君、友彦君、進君、恵さん、
美奈子さん、ゆかりさん、久美子さん、真紀子さんと自分を入れて九人です。五年生は、広和君、
とおる君、あすかさん、由加さん、千絵さんの五人で、合計十四人でした。ここである問題があり
ました。それは、女子は、八人そろっていたので持久走に出場できます。しかし、男子が六人でギ
リギリだったので一人でも「やめたい。」とか言ったり、かぜをひいたり、けがをしたりすると、
Bチームは出場できないのです。男子の中の会話では、

「出られへんかったらいややな。」

など、不安の声がありました。ぼく自身、

「六年で最後やし、出られへんかったらどうしよう。」

と、とつても不安がありました。



出場するメンバーが決まって、二日後くらいから放課後の練習が始まりました。まだ、ぼくには、不安が残っていました。練習は、月・火・木は、フォームを意識しながら六百メートル走り、金曜日には、一・二キロメートル走ってタイムを計ります。ぼくは、一生けん命に取り組みました。そして、一・二キロメートルのとき、いいタイムが出るようになり、メンバーのトップぐらいのタイムでした。ぼくは、そのころから自分のなかで不安が自信へ変わっていききました。それからもずっとがんばり、ぼくは、Aチームの五区を走るようになりました。そのときは、

「がんばってよかった。」

と思いました。でも同時に、Aチームはみんな速いので、

「ぼくでぬかされたらどうしよう。」

と思っていました。でも、ぼくがいろいろ考えているときに、チームのメンバーが、

「がんばろな。」

と声をかけてくれました。ぼくは、友達の支えってとつても大きいなど感じ、チームのみんなのためにも、ぬかれても、一生けん命に走ろうと心に決めました。

友達といろいろ支え合いながらがんばってきて、とうとう明日が本番という日になりました。ぼくは、できるだけ外の環境で調整したかったけど、雨が降っていたので、体育館で練習しました。

明日は本番なので、みんなピリピリしていました。先生から、

「明日は、がんばれよ。」

と言ってもらい、気が引きしまりました。

いよいよ本番の日、行くバスの中で、ぼくはとてもきんちょうしてきました。みんなもきんちょうしている様子でした。でも、ぼく以上に、一区を走る明君や六区の恵さんには、そういったプレッシャーがあったと思います。ぼくのきんちょうがほぐれないまま自然公園に着き、アップの時間となりました。そのときから、

「やることはすべてやったんや、くいのないように走るだけや。」

そう思うようになり、きんちょうは、ほどよいものになりました。一区の明君が十位ぐらいで帰ってきてくれて、二区のゆかりさんも十位ぐらいで帰ってきて、三区友彦君、四区久美子さんと続いてぼくの番でした。待っているとき、ぼくは、あまりほかのことは考えずに走ることに集中していました。それで、ぼくにたすきが回ってきました。ぼくは、たすきをもらったとき、

「このたすきには、いろいろな気持ちが入っているんだな。」

と感じ、一生けん命走りきりました。終わった後は、

「もう、終わったんか。」

と、あつというまのようでした。みんなも、くいのないように走れたみたいやったし、よかったなと思いました。

結果は、チームで十位、個人の五区で六位と、チーム的にも個人



的にもうれしい結果となりました。ぼくは、この駅伝大会に出てほんとうによかったと思っています。そして、この大会に出て、一本のたすきをつないだことによって、ぼくは、仲間を思う気持ち
が成長したと思います。いつも、ぬかしたり、ぬかれたりしていた進君すすきや友彦君ともひこがいなければ、絶
対たいにタイムがのびていなかったと思います。みんなが一生けん命に走り、たすきをつないだからこ
そ、こんないい記録が出たのです。

来年も走ってもらう五年生には、ぼくらの上を行くようにがんばってもらいたいし、この大会に
参加したメンバーが四年生を引ひ張ばって、ともに高め合ってがんばってもらいたいです。

応おうえんメッセージ

西本 吉生にしもと よしお

協力し合って一本のたすきをつなぐ駅伝は、努力すること、役割やくわりを自覚し責任せきにんを果たすこと
のたいせつさなどを教えてくれますが、『ぼく』は、そのうえ、仲間についても学んだようです。
高学年ともなれば、「友達ともだちと仲良くする」だけで満足してはだめでしょう。学び合う活
動どう(駅伝)を通して、おたがいに助け合い、みがき合い、それぞれが高まっていく間まがらであっ
てこそ、真まことの友情ゆうじょうといえるのではないでしょうか。

みなさんには、ときには厳きびしくアドバイスしてくれたり、自分のライバルでもあったりする、
そんな友達ともだちがいますか？

8 小学生生活 最後の運動会

絆きずな

わたしたち六年生にとって小学生生活最後の運動会。組体操くみたいそうのテーマは「絆」だった。九月になって運動会の練習が始まったころ、わたしには「絆」の意味がわからなかった。



最初は、一人技ひとりわざの練習だった。一人技は、すごくうでの筋肉きんにくや足の筋肉を使うし、音楽に合わせて行動するので、すごきたいへんだった。特にV字バイバランスやブリッジがきつかった。

次の二人技ふたりわざは、二人の息を合わせることが必要だった。わたしのパートナーは、最初、かた車ぐるまするたびに、「こわい！ 降ろして！」と言っただけで、サボテンがなかなかできなかった。運動会の係活動の合間をぬって毎日練習してい

ると、ある日できるようになった。そして、それから、パートナーはこわがらなくなった。うれしかった。

次は、四人技。はつきりいって、この四人技はあまり大技もなく、楽だった。

次の八人技、十六人技は、音楽に合わすのが難しいうえに、カヤチームワークが必要でものすごくたいへんだった。

最後のピラミッドと三段さんだんタワーは、同じチームの友達ともたちと話し合っ、何度も位置を変えた。わたしは、初め、ピラミッドの周りにいるおうぎの役だった。でも、とちゅう、ピラミッドに代わってみて、「いちばん下ってこんなにきついんだ。」と思った。ひざは痛いし、こしは上の人を支さえないといけないし、一回やるたびに足やうでがばんばんになった。おどろきだった。友達はこんな思いをしてたんだと思った。

いよいよ運動会。いちばん最後の演技えんぎがわたしたちの組体操「絆」だった。

六年生、六十四人みんなで円じんを組んだ。始まった。あんなにこわかった二人技のサボテンが成功した。八人技、十六人技。チームみんなで、「セーのー！」と言うと



き、これが「絆きずな」かなと思っ
た。一つ一つの技わざが決まる
たびにはく手しゅをもらった。
痛いいた思いやしんどいことを
乗りこえて、このはく手が
もらえるのかなと思った。
三段さんだんタワーも成功した。
「一人ひとり一人が何かを乗りこ
えて、友達ともたちの痛い、しんど
い思いを、体や心で感じて、
初めてみんなで喜びをかみ
しめられるのだ。」と、そ
のしゅんかん思った。

運動会が終わった今も、

「『絆』って何」と聞かれ



ても、うまく言葉ではいえない。けれど、組体操くみたいそうを通して、一人一人が自分のために、そして六十四人みんなのために、心一つにして、努力し続け、最後までがんばったことは、今、心にしっかりと残っている。「絆」って、その六十四人の心にある花みたいなものかもしれない。

おつ
応えんメッセージ

きゅうき
久木 久代

背中せなかが痛い、ひざが痛い、うでがひきつれる、重い、しんどい……でも、歯を食いしばる。みんなが支え合うからできるピラミッド、一人でも力をぬいたら、たちまちくずれてしまうピラミッド。

完成のときはいっしゅんだけれど、そのいっしゅんを求めて、みんなで何度も何度もあせを流して練習してきただね。成功おめでとう。みんなでかがやいたいっしゅんは、いついつまでも六十四人の絆となって心のなかに生き続けることでしょう。「絆の花」、これからもいっさいさかせてね。

9 わたしたちの夢^{ゆめ}

わたしは、今、保育士^{ほいくし}になりたいという夢をもっています。小さいころはパティシエにもなりたいたとも思っていました。

そんななか、六年生になった春、入学してきた一年生はみんななどの子も小さくてかわいい子たちでした。これまで、「小さい子が好きだけ。」と考えていたわたしだったけれど、入学した一年生をお世話^{ほけん}してみても、初めて「保育士になりたい。」という夢をもちました。

わたしは保健委員^{ほけん}をしていて、けがをした小さい子と話しているときに、保健の先生が「小さい子と話すの上手^{しょうず}やなあ。」と言ってくれました。「わたしはやっぱり保育士^{ほいくし}にむいてるのかな。」と思いました。

わたしは保育士の夢をあきらめません。最後にありがとうございます。気づかせてくれた一年生！

ぼくは、サッカーを習っています。サッカーを習おうと思った理





由は、友達にさそわれて練習に行ったら、楽しくておもしろかったからです。二年生の夏に習い始めました。夏の練習は暑く、のどがからからになったり、服があせてびしょびしょになったり、頭が痛くなったりしました。冬は寒くてなかなか体が温まらずベンチコートを着て練習をしたこともありました。ぼくの夢は、サッカー選手になることです。

日本代表の小野選手は、家の庭のかべでボールけりをしていて、たまたま、静岡の名門チームのかんとくが家の前を通り小野選手をオファーしたそうです。この話を聞いて、派手ではなくてもこつこつ努力をすることは自分のためになると思いました。だから、ぼくも、サッカー選手をめざしてこつこつ努力していきたいです。

ぼくの将来の夢は科学者になることです。この夢はこの六年間を使ってじっくり考えて出した結論です。

二年生のころまではどこかの会社に就職するだけでいいと思っ



ことは少ないけれど、大人おとなになったら世の中で困こまっている人の手助けをし、少しずつでもその人たちの力になりたいと思っています。

ボランティア活動をたくさんの人々がやって、世界の人々が幸せになることがぼくの夢の最終地点です。そのために、今、勉強をがんばり、将来しょうらいの基礎固きそがためをして活動に臨のぞもうと思えます。

今、考えていることが夢にどうえいきょうするかわかりませんが、今しなければいけないことをこつこつと努力することが確かくじつ実に夢の最終地点に近づくためのかぎだと思っています。だから、ぼくは、夢に向かいながら「今を生きること」をたいせつにしていきます。

おとう 応えんメッセージ

いとう けんすけ
伊藤 謙介

夢をもつことは、ほんとうにすばらしいことです。人間は、高い目標をもてばもつほど、一生けん命めいに努力をするものです。今の自分では絶対ぜったいにできそうもなくてかまいません。ぜひ、思い切り高く背せのびをして、大きな夢をえがいてください。そして、もう一つたいせつなことは、その夢が必ず実現することを信じることです。

そのように夢を高くかけ、その実現を信じて努力を重ねることで、みなさんの人生は、豊ゆたかで実り多いものになるにちがいません。

10 これからもずっと

もうすぐ卒業。

この小学校で、わたしは六年間を過すごしてきた。

卒業しても、わたしたちの学校でいてくれると思う。

この学校で、たくさんの友達ともだちと出会った。

いつも楽しく遊んだり、ときにはけんかをしたりもした。

でも、すぐに仲直りをした。

一人ひとりではできないことも、

友達といっしょだとやりきることができた。



苦しいときにははげましてもらい、
悲しいときにはなぐさめてもらった。

この学校で、たくさん勉強をした。

とても難しい問題も、先生といっしよなら

解くことができた。

できなかつたことも、こつを教えてもらって、

できるようになった。

この学校で、いろんな感動を味わった。

一生けん命練習したドラムコースも、大成功だった。

演技演奏が終わったときはく手を、今でも覚えている。



もし、この学校が無かったら……、

たくさんの友達ともだちに出会うことはなかっただろう。

六年二組になれなかっただろう。

この小学校に来ることができて、

ほんとうによかった。

わたしにとって、この学校はスタート地点。

ここで学んだことをいかして、

これからがんばっていこうと思う。

わたしたちは、もう中学生だけど、

この学校はいつまでもわたしたちの学校。

母校だ。



この場所にあつてありがとうございます。
六年間、お世話になりました。
そして、これからもよろしく。

※ドラムコーズ……打楽器を中心にしたマーチングバンド。

おう
応えんメッセージ

にしもと よしお
西本 吉生

わたしが小学校を卒業したのは四十六年も前のことですが、卒業式は今でもせん明めいに覚えて
います。呼びかけ、式歌、校歌。帰りぎわに校舎こうしゃをふり返って、思わず泣いてしまったこと……。
学校ってほんとうにいいですね。学校に行けば、話を聞いてくれる友達ともだちがいて、自分を待っ
ていてくれる先生がいます。ほかにも学校のよさを考えてみましょう。また、出身校のことを
母校ほくまうというのはなぜなんでしょうね。

卒業しても、母校ほくまうを訪問ほうもんしようね。先生や校舎が温かくむかえてくれるはずですよ。

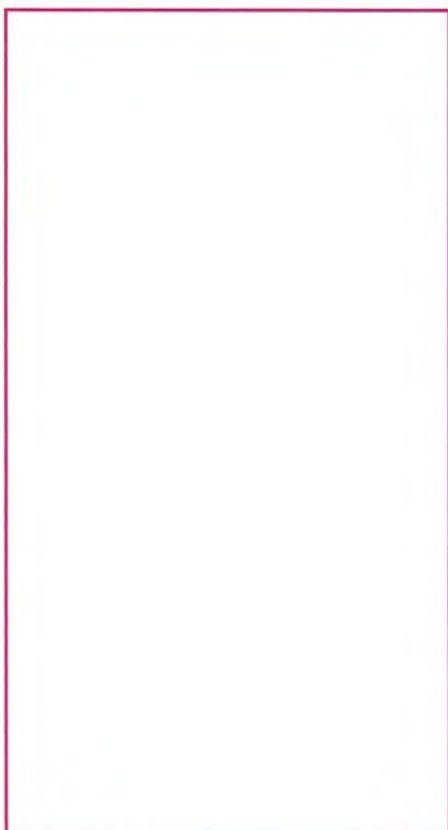


心の広場

◇ 心に残った学習

◇ 真^{しん}げんに考えたこと、大事^{だいじ}だなあと考えたこと

☆今のわたし、これからのわたしについて思っていること

A large rectangular box with a red border, intended for writing. It is currently empty.A large rectangular box with a red border, intended for writing. It is currently empty.A large rectangular box with a blue border, intended for writing. It is currently empty.A large rectangular box with a blue border, intended for writing. It is currently empty.

先日小学校6年生に原爆げんぼくの日の体験を話す機会がありました。ただ、自分の8月6日の実際を話したただけでしたが、後日子どもたちから感想文が届き「生きてくても生きられなかった人がいた。ぼくたちは自分の命も他人の命もたいせつにしたいです」と書かれていました。みごとな感受性です。



あのころは貧ますしかったな。暑いなあ、ジュースかアイスない？となりの幼稚園児兄弟がわが家に遊びに来てくれます。いやあ、あいにく今日はないなあ、と言うと、その兄弟は、ほな買いに行こうと、くたくがあらへん。表の道まで出ると自動はん売機が置いてあって、冷たいもん、熱いもんがすぐに手に入る便利な世の中や。おれの子どもころは、ふろの水くみ、まきわりと5円もらうのにたいへんな苦労やった。やっと手に入れた5円もってアイスクャンディー屋のオッチャンを待った。オッチャンは木箱に町で仕入れたアイスクャンディーをつめて自転車でやって来る。片かたいなかに住んでたわたしの村へ着くころは、かんじんのアイスクャンディーが半分とけてポタポタと…冷たいことも何ともあらへん。

となりのむくな兄弟を見ながら、昔の思い出が重まりました。このまますなおに育ててほしいといのらずにはおられません。



ある暑い日の買い物帰り、白ひがさをたたみながら自宅マンションにたどり着いたときのことで。わたしの前を歩いてきた小学生の男の子が、マンション正面げん関かんの重たいエントランスのとびらを開け、体さで支えながら待っていてくれました。その自然体のふるまいに、やさしさと勇気を感じ、心が温かくなりました。



おとなのタバコの吸いがらを
拾い、ごみぶくろに捨てて
いました！ マナーは子ども
の命です。



転んでひざをすりむいて血が出たとき、^{ともだち}友達がそっと自分のハンカチを差し出してくれたことをうれしそうに話しました。ありがとうございますお友達。それからわが家の息子もかばんの中にはハンカチとティッシュを入れてます。いつか役立つよう。



小学校で図書のボランティアをして帰った日の夕方のことでした。知らない男子が町で出会ったときに「今日はありがとうございます！」とハキハキと声をかけてくれました。わたしの顔を見て思い出してくれたのでしょう。自然にお礼が言えるってすてきですね。



朝の登校時の横断歩道で車をとめて6～7人の集団の小学生に横断をゆずると、わたり終えた全員が横一列に並びいっせいにそろって車に向かって「ありがとうございます。」と、深く一礼してくれました。それはそれは朝から感動ものでした。

府民ほっとメッセージ(2)

こんなすてきな
子どもに出会いました



きょうと 京都府案内



入りのびら

ぼくは大きくなったら
どんな大人おとなになって
いるだろう
わたしは大きくなったら
どんな仕事をして
いるだろう
人生はすべて
出会いだと聞いた
家族との出会い
友だちとの出会い
本や音楽やスポーツ
自然との出会い
多くの出会いによって
いまの自分がある
ことに気づく

いっしょけんめい
と組んだ
小学校時代の
学習や活動かつどうの
経験が
未来の夢ゆめに
つながるといいな
自分が何か
をすることで
まわりのみんなが
喜んだり
やさしく元気げんきに
なったりと
そういう明日あすに
なればいい
とびらの向こう
には
また新たな
出会いが
待っている

京の子ども 明日へのとびら【小学校 高学年編】

● 執筆者

志村ふくみ
上田正昭
中西進
日高敏隆
徳川輝尚
安藤仁介
山折哲雄
小寺正一
衣笠祥雄
茂山千三郎
坪内稔典
鈴木俊哉
木田安彦

崔善今
ドナルド=キーン
千玄室
山本兼一
澤田淳
河合雅雄
梶田真章
松尾心空
西本吉生
久木久代
伊藤謙介

● 挿絵・図版

角田正己 山崎牧子 中久保けい子 木田安彦
奈路道程 倉本恵子 森田みゆき 長谷川容子
よしのぶもとこ きたむらイラストレーション
植田愛子 永井ひろし みやざきひろかず

● 写真

OPO PANA アルピナ 徳川輝尚 時事 林風舎
衣笠祥雄 茂山千三郎 鈴木俊哉 東寺
茶道裏千家淡交会 淡交社 京都新聞社

発行日 平成 28 年 3 月 31 日

発行 京都府教育委員会

〒 602-8570 京都市上京区下立売通新町西入

© KYOTO PREFECTURAL BOARD OF EDUCATION 2007



この資料集は植物性インキで印刷しています。

5年	組	
6年	組	